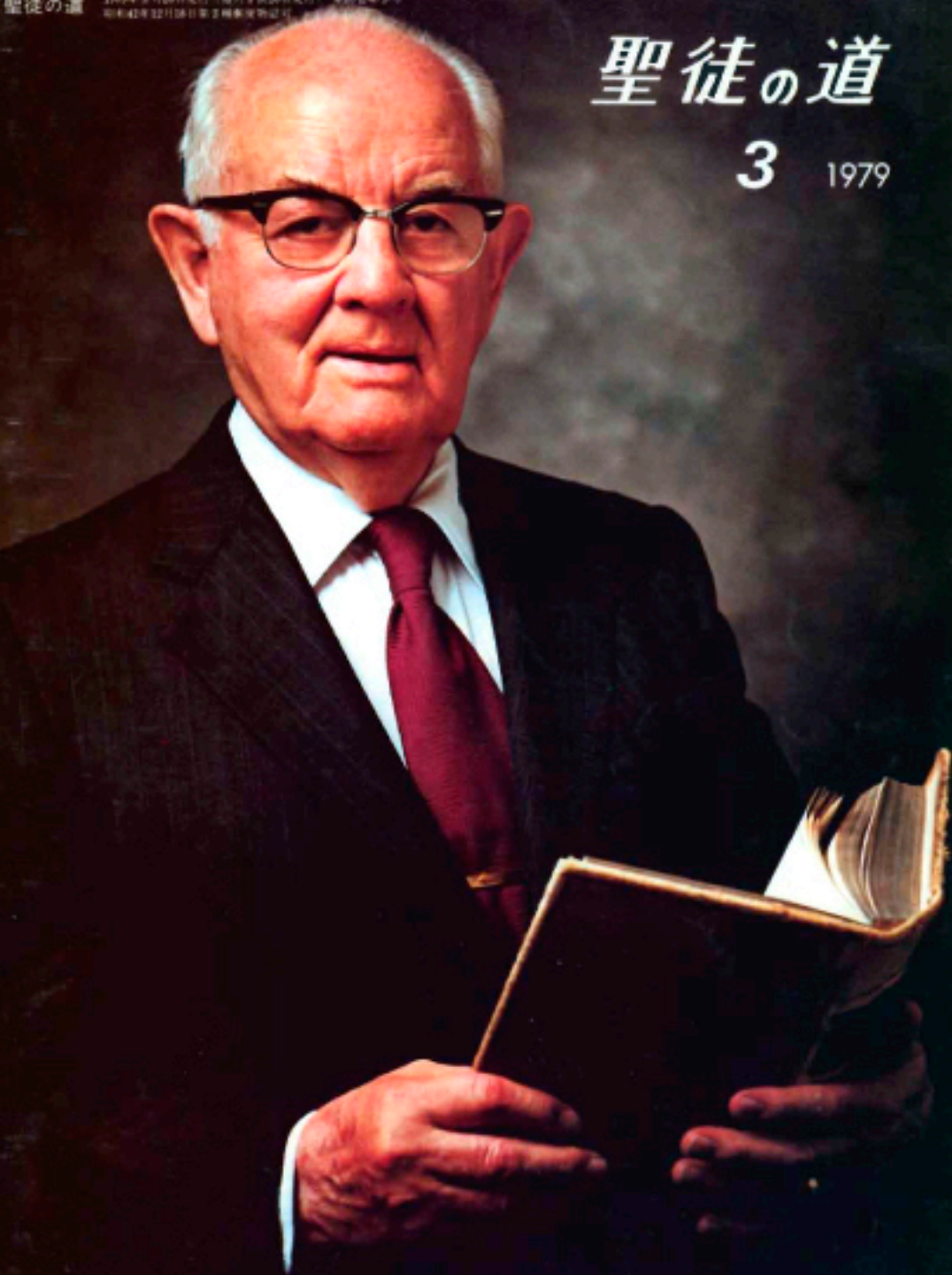


聖徒の道

1979年3月20日発行（毎月3回発行） 第21巻3号
昭和54年3月20日発行 聖徒の道社

聖徒の道

3 1979



聖徒の道

3 1979

末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スペンサー・W・キンボール
N・エルドン・タナー
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン
マーク・E・ピーターセン
リグランド・リチャーズ
ハワード・W・ハンター
ゴードン・B・ヒンクレー
トーマス・S・モンソン
ボイド・K・パッカー
マービン・J・アシュトン
ブルース・R・マッコンキー
L・トム・ペリー
デビッド・B・ヘイト
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア
レックス・D・ピネガー
ヒュー・W・ピノック

教会誌編集主幹

M・ラッセル・バラード・ジュニア

国際機関誌

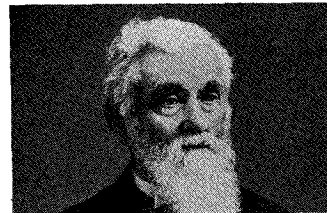
ラリー・ヒラー (編集主幹)
キャロル・ラーセン (編集副主幹)
ロジャー・ギリング (デザイナー)

「聖徒の道」

赤松成次郎 (翻訳部長)

もくじ

幸福は家庭の中から	N・エルドン・タナー	1
シビルの生き方	ジーン・ハーバー	5
予言による神の召し	ボイド・K・パッカー	9
質疑応答		17
先祖の神	レニー・ブール・ポーラス	19
愛のおくりもの		24
きつねとぶどう畑	ドロシー・レオン	26
ほんとうのお友だち	ポール・H・ダン	28
おもちゃばこ		30
ダニエル・チョク	カート・ハーマン	32
伝道が若人に及ぼす影響	オルソン・スコット・カード	35
律法に従ってはじめて 得られる福音の祝福	ロレンゾ・スノー	37
厳寒の下でのバプテスマ	ジーン・チップマン	41
ローカル・ニュース		43



聖徒の道 3月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京都港区南麻布5-10-30
印刷所 株式会社 精興社
配送 東京ディストリビューション・センター
東京都世田谷区上用賀4-9-19
定価 年間予約1,700円 1部150円
海外予約1,700円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA0551AJA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会
東京ディストリビューション・センター

私たちの住む現代社会には、批判と論争が渦巻いているように思われる。あらゆる方面で、新旧を問わず計画に反対を唱えたり、既存の、あるいは新しく提唱された組織に攻撃を加えたりする人々が見られる。しかし、そのような人々が行なう示威運動には、往々にしてただ社会の注意を引くことを目的としているものが多い。教会の中においてさえ、

異なる目的を持った人々が、それぞれ自分たちの目的を達成しようと反目し合っていることがある。確かに私たちは自由意志の原則を堅く信じ、思想と行動の自由を奨励している。しかしイエス・キリストの福音の中には、教会員が和合一致を図るために守らなければならない幾つかの基本原則がある。しかもこの基本原則は人類の平和と幸福を目指すもので

幸福は家庭の中から

第一副管長

N・エルドン・タナー



ある。

私たちを取り巻く世の中に平安がない原因を調べてみると、争いがあるためであるということに気付く。これはすべての人々の一致した見解であり、この事実¹に反論する人はひとりもないと思う。ところが、このような憂慮すべき状況をなくし、平和と秩序らしいものを取りもどそうとする試みが新たな論争を引き起こしている。しかしそれとて、私たちが福音の原則を理解し、生活に取り入れさえすれば、速やかに解決できることである。

この数年間に見られる生活様式の変化と、先に述べた反対運動の増加や激化との間には何らかの相関関係があるように思われる。私たちは多くの家庭が崩壊していること、また、家庭におけるしつけや、訓練が欠如しているという話をよく耳にする。父親と母親が親としての義務を果たすことよりも、社会や仕事に興味の対象を求めるといふこのような生活様式の変化は、子供たちに悪い影響を及ぼさざるを得ない。親として、自分の子供の霊的、一般的な教育を全面的に他人に任せるとはできないのである。それは親の責任放棄以外の何ものでもない。自分の子供、すなわち神の霊の子供を教えるのは親の義務であり、御父は子供たちがご自分のもとに帰るにふさわしい生活をするように望んでおられるのである。

子供に、愛と平安を与えるのは親である。それは親にしかできないことである。自分が何者であるかを知っており、しかも自分が愛され必要とされていることを感じられるような家庭にいる子供たちは、ふらふらと迷い出て自己の存在を確認しようとしたり、既成の社会体制下では得られない幸福を探し求めたりすることは決してないのである。

私が知っている最も幸福な人は、家庭中心の生活をしている人である。もちろん仕事は

非常に大切である。仕事で成功を収めることも幸福に欠くことのできない条件である。しかし、忘れてならないのは、私たちがよく口にする「いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない」(デビッド・O・マッケイ)という言葉である。

世界で最も幸福な女性とは、ほかのどのような所よりも家庭にいることを好む夫や子供たちを持つ人、学校から帰って来るなり母親の姿を捜してその日あったことを話してくれる子供を持つ人である。彼女は、子供と悲しみや喜びや成功を共にし、子供が何かを成し遂げた時は一緒になって喜ぶ。また、子供が政治や仕事、地域社会において指導的立場に立てば誇りに思う。彼女はさらに孫にも愛を注ぐことを忘れない。そして、孫たちとの交わりの中に満たされた新しい世界を見いだすのである。

私たちは子供たちを大切に育て、彼らが立派な市民となって、地域社会や国の指導的立場に立てるように備える必要がある。「揺りかごを揺り動かす手は世界を支配する」という言葉がある。女性にとって、子供を地域社会の指導者たるにふさわしく育てること以上に大きなチャレンジがあるだろうか。また息子を神権者、誠実な夫、父親となるように、娘を清く汚れなく、立派な妻、母親となるように備えさせること以上に大きなチャレンジがあるだろうか。

世の中の問題を解決しようとするならば、第一に将来の指導者を育てる家庭に目を向けるべきである。女性にとって、子供をもうけ、その子に感化を及ぼして社会の悪を正す器となるように育てること以上に社会に貢献できることはない。

何らかの理由で子供のいない女性も、同様に社会における自分の役割を見いだし、大きな感化を及ぼすことができる。現に、多くの

女性が他の家族の子供たちのために働いたり、自分の才能を生かせる活動に参加したりすることによって、周囲の人々に少なからぬ影響を与えている。ここで、母親になることを欲しない女性に申し上げたい。私たちがこの世にいるのは私たちを産んでくれた母親のお陰である。また、もし母親の優しく愛情に満ちた導きと幼ない頃の家庭教育がなかったならば、私たちは今のように人のために価値ある奉仕をする立場に立つことはできなかったであろう。さらに私たちは、また母親となっていない多くの女性が、教会の補助組織やその他援助を必要とする様々な分野で計り知れない奉仕をしていることを知っている。

数年前、オハイオ州にある歴史的に有名な女子大学ウェスタン・カレッジは、オセーリア・コンプトン女史に法学博士号を授与した。名誉博士号は普通、科学や芸術の分野で優れた業績を残した人に授けられるものであるが、74歳のこの女性は「コンプトン家の妻、母親としての功績」に対して法学博士号を贈られたのであった。

記事には次のようにある。「彼女の夫と3人の息子たちの名前が『米国名士録』の1ページを埋めている。しかし、中西部の農家で彼女が主婦として輝かしい数々の功績を残したことについては一言も触れられていない。」彼女の先祖はごくありふれた農家の出であった。しかし、妻としてまた母親としての彼女の優れた働きが、予期しなかった名声を彼女にもたらしたのである。

ある記者は彼女と型通りのインタビューをすませた後の経験を次のように記している。「彼女の料理には伝統の中に新しさがあり、また非常にオーソドックスな反面革新的でもある。そして、どこにでもありそうだが、それでいていつまでも忘れることができない、まったく不思議な味である。ところが彼女は

こともなげにこう語った。「ただ聖書と常識に従ったまです。」また、遺伝についての記者の質問に、彼女は次のように答えている。

「それは、人の価値は血筋を通して引き継がれていくという考えですか。それでしたら私はそうは思いません。たとえばリンカーンを見て下さい。彼の場合、そういう意味での『遺伝』はまったくありませんでした。歴史に登場する身をもち崩した王や、『良家』といわれる家の役立たずの息子や娘も、その良い証拠です。私は遺伝が人にそれほど影響を及ぼすとは思いません。私はこれまで普通の市民の子供たちが立派な人となっているのを数多く見てきました。ですから、遺伝が影響するとは思えないのです。

とは言っても、誤解しないで下さい。確かに大切な遺伝もあるからです。それはしつけという遺伝です。子供というのは、概して自分の両親から学ばない限り、良い習慣を身につけることはできないものです。言ってみれば環境の遺伝です。これは代々引き継がれていくものなのです。」

さらに彼女は、「遺伝がないとすれば何ですか」という記者の問いにこう答えている。

「それは家庭です。米国人の生活の悲劇は、これほど家庭が必要とされているにもかかわらず、家庭を大切に考えないことから生じています。悪い家庭から生まれたものを学校や社会が改めることはできないということを、親は忘れてしまっています。子供を育てることは親の第一の務めであることを忘れてのです。今日では、子供の世話をするのにお金を出して人を雇います。昔はそうではありませんでした。どんなに使用人を雇う余裕があっても、自分の子供は自分の手で育てたものです。親としてまず忘れてならないのは、子供は総じて親以上に飛び抜けて良くなることはないということです。親がけんかをした

り、ふしだらなことをしたりしていれば、子供が親と同じような道を歩んでも不思議ではありません。」

子供の育て方についていろいろな角度から話し合った中で、忍耐を要する適切な仕事を与えることの大切さについても語っていた。記者は質問した。「ところで、その適切な仕事とは一体どういうものですか。」

彼女は、答えた。「つまり仕事それ自体が良いものでなければならぬと言うことです」さらに記者は尋ねた。「それではお金のために働くことは間違っているのでしょうか。」

彼女は答えた。「そうです。子供にお金のために働くことを教えるのは、世間で言う成功こそが最も尊いと教えるようなものです。けれども、そのような成功は幸福とは何の関係もありません。親も学校もそのように教えるから、お金の有無で幸福か否かを測るような時代になってしまったのです。お金のために生きているような人は決して満足することはありません。いつか自分はなぜ幸福でないのかと考える時が来ると思います。それは、人生の目的が間違っているからです。」

コンプトン女史の話は私たちに親のもうひとつの大切な責任を教えている。それは、子供に彼らの人生における目標を立てさせ、それに到達できるように彼らを助けることである。特に、家庭で子供と一緒にいることの多い母親は、子供の日頃の生活に注意を払うことによって大きな影響を与えることができる。

ところで、これは何も女性が家庭での務めから解放されないということではないし、教育や教養、趣味に対する関心を追求できないという意味でもない。実際、家庭の仕事を上手に計画し、さらに知識を深め、視野を広めている女性は子供を育て、力付けるのに素晴らしい成功を収めている。私たちの周りには、家庭の務めをよく果たし、なおその上に学習

を続けている母親が大勢いる。

教会の女性たちはそのような知識を増すための格好の場を持っている。補助組織、特に扶助協会にはこの目的を達成するための様々なレッスンが用意されており、主のみ業を推進しながら、家庭の外での交わりや経験を得られるようになっていく。母親たちが霊的な活動に参加して、子供たちに彼らと天父の関係を、また天父が彼らに何を期待しておられるかを教えることによって、地域社会も増々強められていくのである。

デビッド・O・マッケイ大管長は、母親に向けて次のように語っている。「幾百万の人々の心を動かすような偉大な書物や絵画を創造することのできる人は、賞賛と賛同を得てしかるべきであろう。しかし息子や娘たちを丈夫で申し分ないまでに育てることができる母親の影響力は、絵が色あせ、書物が絶版になってから後も、幾世代にもわたって人の心を揺り動かすであろう。そのような母親は、人が与えることのできる最高の荣誉と神の選りすぐりの祝福を受けるに値するのである。人の霊に不滅の体を与えるという崇高な務めを果たすことにより、母親は人類への奉仕者となり、創造主ご自身と共同の創造者となるのである。」(Improvement Era「インブループメント・エラ」1936年5月号)

女性には自分の周りにいる男性に影響を及ぼす機会が沢山ある。これは女性にとって大きなチャレンジである。女性が徳を堅く大切に守り、自己の信念に従って生活する時、女性が男性に与える影響には計り知れないものがある。時折、母親が夫にその義務を果たすように励ますだけで家庭の清さは前とはまったく違ったものとなる。それは時には困難を伴う。しかし、主に忠実である限り、主の助けを求めて行なうならば、必ず大きな力と慰めを得るはずである。

シビルの生き方

不活発な夫と20年間結婚生活を送っている
末日聖徒のある姉妹が学んだこと

ジーン・ハーボ―

トムと私、と言ってもこれは仮名ですが、私たちは神殿で結婚して20年以上になります。けれども、トムは結婚して数カ月後から教会に不活発になりました。

私は失意のどん底に落ちたこともしばしばでしたが、ともかくも私たちは危機を乗り越えてここまでやってきました。でも、今は感謝しています。

ふたりで神殿結婚を計画した時でさえ、私は複雑な気持ちでした。私は教会が真実であることを信じていましたし、私にとって教会は非常に大切でした。ですから、神殿以外の場所での結婚など考えられませんでした。私は、主の道に沿った結婚をすれば、トムもきっと福音に従い、神権を尊ぶようになると思ったのです。でも心の中ではトムがまだ心から主に従っていないことを感じていて、彼に対する愛に一抹の不安を覚えることが時々ありました。

その不安が現実となったのです。神聖な神殿の中でも、奇跡は起きませんでした。

結婚当初から、私たちは一緒にひざまずいて祈るということがありませんでした。時がたつにつれ、夫は何かと理由をつけて集会を休んだり、神権者の責任を怠けたりするようになりました。私には、夫と一緒に教会を休んで家にいることもつらいことでしたが、か

といてひとりで出掛けたところでまた悲しい思いをするだけです。私は悩みました。人生で最も大切な夫と教会の両者がどうして両立できないのかと思いました。私は強い証を持っていました。福音に対する思いも教会で奉仕したいという望みも決してうやむやにできるものではありませんでした。しかしその時、私は夫がどんな気持ちでいたのかということを知りませんでしたし、考えもしませんでした。

トムは不活発な両親のもとで育ったため、福音が生活にどんなに大切かということを実際に感じたことがなかったのです。その上、私が自分にとって福音は大切ですよと言うので、彼にとってはあまりおもしろくなかったのでしょう。彼は次第にふさぎ込み、腹を立てる日が多くなりました。教会に行くことは、彼にとっては私のわがままでしかなかったのです。彼にとって日曜日は、朝寝をしたり、釣りやゴルフに行ったり、野良仕事に出掛けたりする大切な日でした。しかし、私には日曜日は神聖な主の日であり、神聖な義務を果たす聖なる日でした。そんなわけで夫が怒って出掛けることもよくあり、そんな時、私はどうしようもなく泣きました。トムからも主からも心が遠く離れてしまったように感じました。ふたり共、結婚を後悔する気持ちを抱

き始めたのでした。

ある晩、結婚して1年半ほどたった頃、私はまったく予期せぬ重大な岐路に立たされました。初めての子供を宿していた私は、その晩の初等協会の準備会にはあまり出たくありませんでした。でも、出席しました。そしてその日受けた現職コースのレッスンは素晴らしく、私にとって決して忘れられないものとなったのです。レッスンは、福音に従うならば主はその人の生活を守り導いて下さるといいうテーマでした。序文にこう書かれていました。「私たちがこの世にいるのは試され、自らのふさわしさを立証するためである。主は決して安易な人生を与えては下さらない。私たちは毎日自分の下す決定によって試しに合格し、あるいは失敗する。もし私たちがいかなる反対に遭おうとも、正しいことを選ぶならば、主は私たちを助けて下さる。シビルの話はそのことを私たちに教えている。」

私は夢中でシビルの話に聞き入りました。シビルと夫のフランクは長い間教会に不活発でした。話は、一番上の子が10歳になった時に起こったあることがきっかけでシビルが教会にもどったところから始まっていました。(私は、自分たち夫婦の場合、10年も耐えて行けるだろうかと疑問に思いました)しかしシビルと子供たちが教会で成長するにつれ、それに反比例するかのごとく、夫はますます反発するようになりました。シビルは神殿に行きたいと思うのですが、フランクはますます意固地になっていくようでした。シビルは離婚という私と同じ不安を抱きました。自分もまた不活発になって、夫婦の危機を解消した方がよいのだろうかとも考えました。

シビルの監督の答えは、そのまま私への答えでした。私はそれを耳にした時、自分に変わる勇気さえあれば、私たちにもまだ希望が残されていると思いました。

監督の話では、夫の生活にはまだ福音がな

いので私たちの気持ちを理解することができないのだということでした。監督はこんな助言をしていました。「今は忍耐することです。……ご主人の良い点をいつも考え、あなたの愛と感謝の気持ちを述べ、ご主人を認めていることを知らせて、前のような良い関係を取りもどして下さい。それから、自分にとって教会が必要なことを分かってもらうのです。教会に行かせてもらえるならばご主人が行かなくてもとやかく言わないということ、ご主人と了解し合うようにして下さい。そのほかあらゆる点で、自分で最良と思う妻になって下さい。」(*Don't Close the Door* 「ドアを閉めないで」1959—60年初等協会現職レッスン, pp. 140, 145—46)

この言葉は私の胸を強く打ちました。「そのほかあらゆる点で、自分で最良と思う妻になって下さい。愛と感謝の気持ちを述べ、ご主人を認めていることを知らせて、前のような良い関係を取りもどして下さい。今は忍耐することです。」

そして最後に監督はこう言いました。「主はあなたに、教会にとどまって子供たちに主を愛し、主に従うことを教えてほしいと願っておられます。主はあなたと共におられます。」そう言って、主の約束を読んでくれました。「わたしはあなたに命じたではないか。強く、また雄々しくあれ。あなたがどこへ行くにも、あなたの神、主と共におられるゆえ、恐れてはならない、おののいてはならない。」(ヨシュア1:9)

こうしてフランクは、それから6年ほどして、教会に再び活発になりました。それにはふたつの理由が考えられます。ひとつは、シビルが監督の助言に従って、忍耐強く愛ある妻となったことです。彼女は子供たちに、父親を愛し、敬うように教えました。もうひとつは、主が、フランクにとって何が一番大切なのかを考えさせるために、あることを引き起

こし、フランクの注意を喚起して下さったことです。

シビルの物語を聞きながら、私は自分のことを振り返ってみました。自分に悔い改めなければならない点が沢山あるのを認めることは容易ではありませんでした。その上、自分に「奇跡」が起こるのを6年も待つなど想像できないことです。けれども、とにかくその監督の助言に従うことにしました。するとそれを契機に、夫婦の間が良くなり始めたのです。

私は今も待っています。忍耐し、希望を持って待っていますが、なかなか容易ではありません。これまでに家族としての多くの祝福を逃して落胆したこともしばしばありました。トムは、息子が生まれたから祝福したいとか、バプテスマや確認の儀式を施したいとか、神権を授けたい、灌油の儀式をしてあげたいというふうには考えてくれませんでした。家庭の夕べを開いたこともありませんし、家族の祈りもせず(トムを除いてならしていますが)、食事の祝福もしたりしなかったりで、子供たちとの福音についての話し合いも私と子供だけといったふうで、私の満足のいくようにはなりません。そんなトムも息子たちに全然かまわないというわけでもないので。肩を並べて畑仕事をすることもあります。話を聞いてやったり、子供たちの出演するリサイタルやロードショーなどのプログラムを見に行ったり、神権活動を一緒にしたりということはないのです。彼は子供の成長にとって何が非常に大切なのかをまだ理解していないのです。

私は母親としてどうしてもこのような父親の欠点が目についてきます。さらに妻としての苦痛もないわけではありません。特に自分が教師や副会長に召された時にそれを感じるがあります。トムの助けはほとんどありませんし、霊的な事柄を心と心で分かち合う

こともありません。

それでも、私は教会で活動の中から多くの祝福を得てきました。神権の慰めと祝福にあずかることもできますし、聖餐を受けて主との誓約を新たにすることもできます。聖典を勉強して精神を高めることもできます。また扶助協会を通して無限に成長する機会にもあずかっています。

信仰の篤い多くの姉妹たちと知り合うことができました。その中にはシビルのように、「ひとりで」真の改宗をし、決して揺らぐことのない証を持ち続けている姉妹たちもいます。彼女たちの理解がこれまでも私の大きな支えとなってきました。彼女たちの友情が私の人生の空洞を埋めてくれました。私たち夫婦が親しくしている友達の中には活発な会員はほとんどいませんでした。それは、教会員と親しくすると自分を改宗しようとするからと言って、トムがいやがったからでした。それでも主の答えは、教会の活動に活発に参加するよにということでした。あの晩シビルの話を聞いたように、祝福は、自分のなすべきことをしていなければやって来ません。そのためにも一層綿密な計画を立て、強い信仰を持ち、よく祈ることが必要になってきます。主の助けを得るためには、何よりも自分がしっかりとした信仰を持つ必要があると感じました。

もうひとつの主の答えは、モルモン経の中でアルマが息子たちのために祈ったように、私にもトムのために熱心に断食して祈る責任があるということでした。(モーサヤ27:14参照)私は今、主が天使を遣わしてトムに注意して下さることはないかもしれないが、その代わりに、天使と同じ権能を持った僕たちがこの地上にいてその方法を示して下さるはずだと思っています。主は私たちの祈りにこたえる方法を示して下さい。その先は、トムが自由意志を使ってどう行なうかにかかっ

ています。

もし「思いつかないこと」が起こって、トムが福音を受け入れなかったらどうなるでしょう。再び、アルマはこう教えています。アルマがある町の民を改宗に導けなかったために悲しみ沈んでいた時、同じ天使が現われて、こう言ってアルマを慰めました。

「アルマよ、汝はさいわいである。頭を高くあげて喜べ。汝は喜ぶ充分の理由がある。なぜならば、汝は始めて神の戒めを受けてからこのかた、忠実にその命令を守っているからである。」(アルマ8:15)

私たちも真心から忠実であったなら、悲しみに沈む必要はありません。自分の連れ合いのことを嘆き、いつもふさいでいては、私たちがだれにも祝福を与えることはできません。心を惑わして悲観的になることなく、いつも明るくしているならば、主の助けを得て、自

分の救いの道を歩み、周囲の人々に霊的な光を投げかける力が具えられるはずです。そうする時に、やがて救い主とまみえる場で、私たちは最善を尽くしましたと喜んで報告することができるのです。

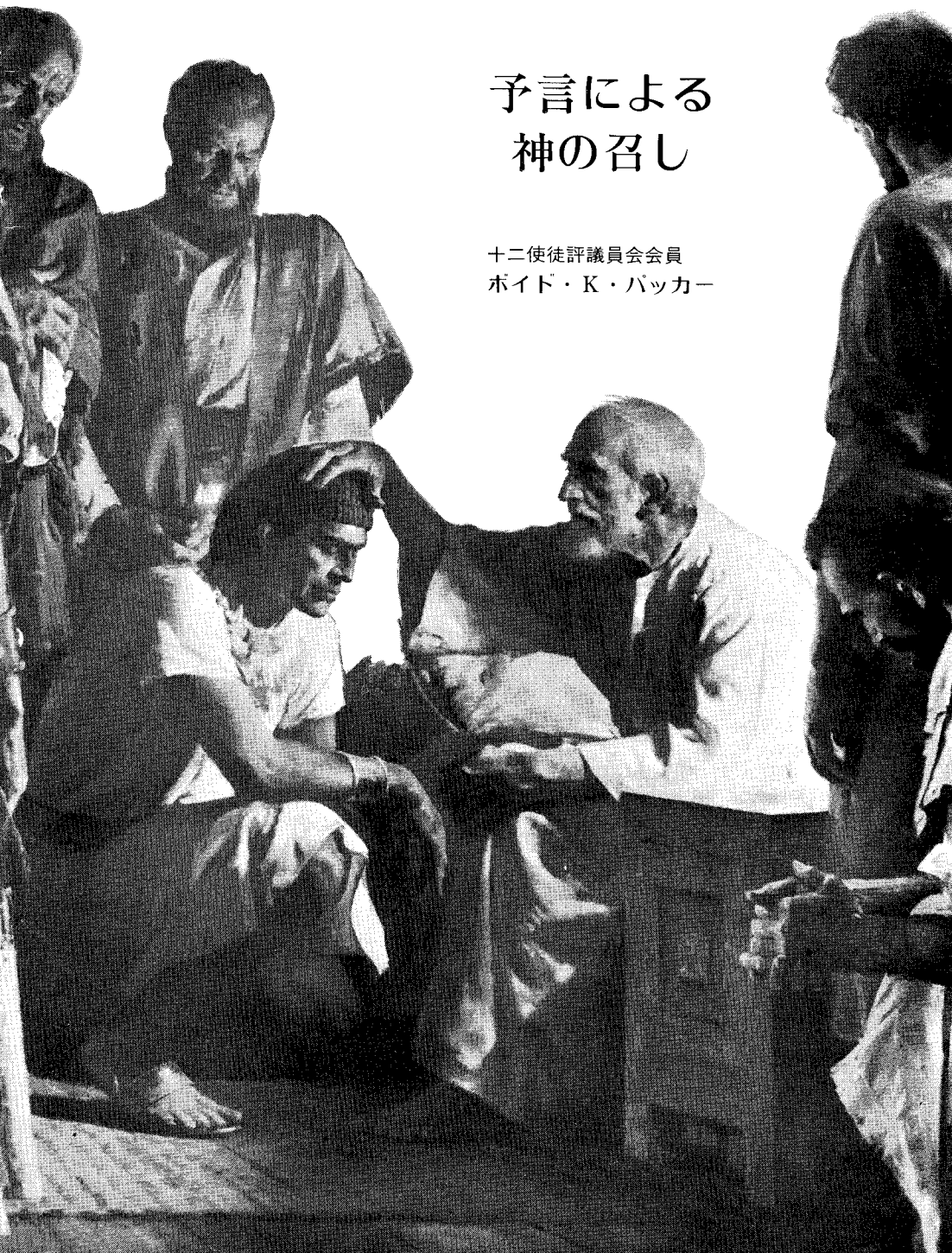
もしもう一度やり直せるとしたらあなたは今の夫を再び選びますか、と尋ねられたことがあります。20年前、もし私が歩む道を知っていたならば、恐らく別の道を選んでいただろうと思います。でも、この間に私は忍耐することを学びました。シビルの生き方を知って、トムに対する私の愛は大きくなりました。今私は、一生をかけて待つだけの価値がある良い人と自分は結婚したと心から思っています。その信仰こそ私に希望を与えるものなのです。そして福音に対する愛と夫への愛は、今でも私の人生の最も大切な宝として消えることのない光を放ち続けています。

真実の幸せ

主の戒めを守る時に私たちは幸せになる。そのことを考えると、私たちにあって、戒めを守ることはそれほど難しいことではない。互いに愛し合い、誠意を尽くし合う夫婦は幸せになる。そのことを考えると、愛と誠意を尽くし合うことも難しいことではない。また、父母を愛し、敬う息子、娘は幸せになる。そのことを考えると、これもまた難しいことではない。隣人に正直である人も幸せになる。什分の一と捧げ物を納める人も祝福と幸せを得る。このように挙げてゆくと限りがない。そこで私は、こう申し上げたい。幸せという名に値するもの、そしてこの世に存在する真実の幸せはすべて、人が知っていようが知っていまいが、神の戒めに従って生活することによってもたらされる、と。——ジョージ・アルバート・スミス

予言による 神の召し

十二使徒評議員会会員
ボイド・K・ハッカー



私 はこれから非常に神聖なある事柄についてお話ししたいと思います。このことを考える時に、私の胸はいつも感謝の気持ちで満たされます。古代の予言者モロナイの問いに関連して、幾つかの経験を交えながらお話をしたいと思います。モロナイは次のように問うています。

「奇蹟の時代はすでに過ぎ去ったと言えるか。

天使たちはもはや世の人に現われないということが言えるか。神はすでに聖霊の力を人々に与えることを止めたもうたと言えるか。時が存在するかぎり、大地があるかぎり、または救うべき人が一人でも地上にのこっているかぎり、神は聖霊の力を与えることを止めたもうであろうか。」(モロナイ 7 : 35—36)

この古代の予言者は、これらの問いに自ら次のように答えています。

「よく言っておく、そうではない。奇蹟は信仰によって行われ、また天使が現われて人に導きと恵みとを伝えることもまた信仰によるのである。それであるから、もしこのようなものが終ってすでに無い時がくるならば、それは不信仰の結果であってすべては空しいから世の人はまことに禍である。

キリストの御言葉によれば、キリストの御名を信ぜずに救いを得る者はない。それであるから、私は以上述べた奇蹟、天使の導きと恵みを与えることなどがすでに無い時は信仰もまた絶えたのであって、世の人は恐ろしい有様、すなわちあたかも贖いがないかのよう有様になる。」(モロナイ 7 : 37—38)

主はこの世で導きと恵みを施しておられた時に、信じる者には次のようなしるしが伴うと約束されました。

「信じる者には、このようなしるしが伴う。すなわち、彼らはわたしの名で悪霊を追い出し、新しい言葉を語り、へびをつかむであろう。また、毒を飲んでも、決して害を受けない。病人に手をおけば、いやされる。」(マルコ 16 : 17—18)

このような奇蹟は今も昔も地上における主の教会の証であり、私たちもよく経験していることです。そればかりでなく、私たちの教会ではむしろ当り前のことのように見なされており、大げさに語られることはありません。私たちは奇蹟を謙虚に、しかもこの上なく敬虔な気持ちで受け入れるようにしているからです。

今朝、私は、そのような奇蹟とは異なる奇蹟、すなわちもっと穏やかでいつも私たちの身の回りにあり、それでいて見落しがちな奇蹟についてお話ししたいと思います。

先日の証会で、私の友人が会社の同僚と話し合ったことについて述べていました。彼はその同僚を活発な教会員で、いつも教会に忠実な会員だと思っていました。しかし会話の中でその同僚が教会で人々を役職に召す時どうも靈感によって行なわれていないような気がすると言うのを聞いたのでした。いいかげんに召しているようで、とても靈感が働いているようには思えないと言うのです。それが自分ではふさわしくないと思っているのに責任に召されたことなのか、あるいは召された

人が気にいらなかったのか、それとも不適格と思っていた人が召されてそう思ったか分かりません。教会の召しをしぶしぶ受けて責任を果たさない人を見て、そう言ったのかも知れません。しかし、私はその友人と皆さんに、教義と聖約から聖句を引用したいと思います。主は次のように述べておられます。

「われ命を下すに人これに従わずば、われ我約束を取消し祝福を与えず。

その時、人々心の中に言わん。こは主の御業にあらず、主の約束果されざればなりと。されどかくの如き人は禍なるかな。その報いは地の下に潜み、天よりの報いあらざればなり。」(教義と聖約58：32—33)

今にわかりますよ

ここで、教会の責任に召された人がその召しにこたえる時にどのような奇跡が起こるかについて考えてみたいと思います。教会で指名されて召しを受ける過程と、召しにこたえる時に受ける証、それはいつも私を謙遜にしてくれる奇跡です。しかしその召しに靈感が働いていないという忠告は、私たちが真剣に考えなければならないことです。

何年も前のことですが、私はある非常に大切な教訓を学びました。確かハロルド・B・リー大管長に2度目にお会いした時のことだったと思います。私はステーク部高等評議員という責任をいただいていた。ある時、高等評議員会でステーク部長から指導者としてひとりの兄弟の名前が提案されました。私は当時セミナリー教師をしていて、同じセミ

ナリー教師のレオン・ストロング兄弟からその兄弟のことについて1、2度話を聞いていました。彼は実に有能で、奥さんのことが障害になって才能を発揮できないということももったいないと話していたのでした。奥さんは意地悪とでも言える性格の持ち主でした。そのことが問題の根底にありました。

ステーク部長がその兄弟を管理役員に推薦し、賛成の挙手を求めた時、ふたりが反対しました。ふたりだけというのがむしろ不思議なくらいです。ステーク部長はこの召しについて数分話してから、とにかく話を進めたいと思うと言い、この召しについては自分を支持して欲しいと言いました。そこで状況は一変しました。

その時、私は、これはステーク部長を支持するかどうかの問題であり、この神権者が職に就くか否かということとは関係ないと思いました。そこで再び賛成の挙手を求められた時、私とストロング兄弟は、ほかの10人のステーク部高等評議員と共に賛成の意を表明し、その兄弟の召しは承認されました。

それから1、2カ月後にステーク部大会が開かれ、十二使徒評議員のハロルド・B・リー長老の管理の下に、任命が行なわれることになりました。そこで私たちは大会後、任命を行なうためにステーク部センターに集まりました。リー長老は監督1名、副監督2名、その他数人を任命しました。次いで例の兄弟が呼ばれ、十二使徒評議員会会員により任命されることになりました。ストロング兄弟は隣に座っている私をひじでつつき、笑みを漂



ボイド・K・バックナー

わせた顔を私に近づけてこう言いました。「バックナー兄弟、この教会が啓示によって運営されているかどうか、今に分かりますよ。」

リー長老はその兄弟の頭に両手を置き、いつもの任命の言葉を言い始めましたが、一瞬言葉が途切れました。それから、次のような意味のことを告げました。「この場で他の人々に宣言されたと同様に、活動や生活、職業の面であなたには数々の祝福が与えられるでしょう。しかし、そのほかに今あなたに特別な祝福を与えます。」そしてこの兄弟は祝福を受けた者の中でも最も長く、しかも最も示唆に富んだ祝福を受けたのでした。それは、彼に対するというよりも彼の妻に対する祝福でした。実に興味深い光景でした。

私は会が終わるとすぐにリー兄弟のところへ行き、「任命する前からあの兄弟を御存じでしたか」と尋ねました。

「いいえ、存じません。この部屋に来て初めてお目にかかった方だと思います」という返事でした。

そこで私はリー長老に言いました。「彼は特別な祝福を受けたようですが。」

「はい、私もそのように感じました。」リー長老はこのように答えました。

後でステーク部長から次のような説明がありました。「リー長老にこの度のことをお話して、特別な祝福が必要な人がいることを言うつもりでいたのですが、忙しくてその時間がありませんでした。」ストロング兄弟の言った通りでした。こうしてその日、私たちはこの教会が啓示によって導かれていることを知ったのでした。

伝道の召しの奇跡

教会が順調に発展するにつれ、十二使徒評議員会の兄弟たちは、ステーク部の組織や改組で、世界各地のステーク部で開かれる大会にほとんど休みなく出席しなければならなくなりました。それはいつも靈感に満ちた興味深い経験です。訪問の割り当ては私が希望したのでも、求めたのでもなく、そこにはいつも啓示の原則が働いています。

世界のどこへでも、土曜日の午後には到着しなければならないことを考えてみて下さい。時には飛行機が遅れ、集会が変更されること

もあります。しかしそれでも翌朝には新しい指導者を召さなければなりません。しかも、まだ一度も会ったことのない人を。時には言語の壁があることもあります。もし私たちがそれを人間の方法とするならば、履歴書や身上書が必要であり、面接を繰り返し、身元調査を行ない、知人や隣人と会う必要があるかもしれません。しかし、実際にはそのようなことをしません。それは不可能なことです。時間がないからです。世界は広く、ステーキ部も多く、訪問先は沢山あります。主にすべてをゆだね、簡潔に問いかけ、直接にしかも明確な誤りのない答えを得られるということは驚くべきことです。私はそのことを思う度にいつも謙遜になります。教会員の召しと解任の手続き、これはひとつの奇跡です。

はつらつとして生気がみなぎり、人生に対する希望で胸を膨らませた若者、しかも物質的なことに興味を示してしかるべき年齢の青年が、進んで伝道の召しを受け、自費で、自分の人生の2年間を捧げて福音を宣べ伝える。何と驚くべき信仰でしょうか。これが奇跡でなくて何でしょうか。確かにこれは奇跡です。そのような若者が教会には25,000人以上もいるのです。

私がニューイングランド伝道部を管理していた頃、伝道本部から3,200キロ離れた所にふたりの宣教師が働いていました。ある日、私はふと考えました。「何と素晴らしいことだろう。ごく普通の平凡な十代の青年を、伝道に召し、任命し、同じ年代の同僚と共に、自分で蓄えた何がしかの生活費を持たせてどこ

かへ行かせる。デートもしてはならない。ただ自分のすべての時間を伝道活動に捧げなさい」という厳しい宣教師の規則を与えて送り出す。」また、宣教師が自動車を使うこともあります。そのことをどうかと思う人がいるかもしれませんが、心配はまったくありません。大丈夫なことは現実が示しています。

たとえ3,200キロ離れた所にも信頼できるのは、彼らがこれは自分たちの教会で、キリストが自分たちの主であることを知っていたからです。また教会の支持の過程、すなわち召しに関する啓示の原則がこの教会の生活の運営原則であることを知っていたからです。

自分の欲望を捨て、仕事を中断し、政治活動をやめ、しばしば会社の役職や退職金を投げ出して、物質的には何の見返りもなく、ただ伝道部を管理するというだけで、何の疑いも抱かずどこへでも行く。一体何が人をそうさせるのでしょうか。

数年前、西ヨーロッパの幾つかの伝道部を担当していた時、次のようなことがありました。ちょうどある国の言語に堪能な伝道部長が必要になりました。数人の名前があがりましたが、適当だと思われる人はだれもいませんでした。その時、ひとりの教会幹部が以前に会ったある人物のことを思い出しました。確か数年前に韓国で会った人だったと思います。その人は税関で働いていました。その人の名前が出された時、みたまによる確認がありました。時間が迫っていたこともあって、彼は電話で伝道部長に召されました。それか

ら数週間後に私は彼のもとを訪れました。彼はワシントンD.C.に住んでいました。すでに担当部門で高い地位にあり、いつかはその部門の総責任者になるだろうと目されていました。さらに彼の上司から、自分は健康上の理由で近々退職するので彼を後継者として推薦するつもりであるとの話もありました。召しの電話を受けたのは、ちょうどその時のことでした。

彼のことをよく知りたいと思っていた私は、彼の招待に応じて彼の家に一泊することにしました。その時、彼は私に上司からの手紙を見せてくれました。それには次のように書かれていました。「君の教会のパッカー兄弟とやりに、君は伝道に出ないことをお話なさい。私たちはこれまで30年間君と一緒に働いてきたが、君はまだ私を改宗していない。彼らは大きな間違いを犯そうとしている。それに君までも同じ間違いを犯そうとしている。あきれた人としか言いようがない。……退職後の快適な生活をあきらめ、これまで長年働いてきたことを無にしてまでも、なぜ、どうしてそんなことをするのかね。」

答えは簡単明瞭、召されたからです。この教会では、召しに対する答えは召しを与える人の証ではなく、召しを受ける人の証によるのです。

この出来事に関係して興味深いことが起こりました。私たちが捜していたのはフランス語を話せる人でした。ところが彼が着任してから、スペインにいる教会員たちの問題が生じ、その時初めて彼がスペイン語を書くこと

も話すことも上手にできることが分かったのです。もし私たちがフランス語とスペイン語が話せて、しかも外交経験があり、ことに税関業務に詳しい人を教会の中で捜していたら、世界中を捜しても恐らく見付けられなかったことでしょう。それが、数年前に韓国でフランス語を話す人に会ったという教会幹部の「ふとした」記憶によって彼を見いだすことができたのです。

みたまの勧め

教会の召しに伴ってもたらされることが3つあると私は思います。第一は、しばしばみたまの勧めがあって備えられるということです。週末に新しいステーク部長を召す時、私たちはよくこう尋ねます。「ステーク部長、この召しのことはいつ知りましたか。」私が言わなくても彼にこの召しが知らされていることを私はよく知っているからです。すると彼は自分が味わった神聖な経験について話してくれます。ここではそのことについて詳しく語るのを控えますが、とにかくその召しに対して備えをすることができたのです。

試し

第二に、召しに関連してよくあるのが試しです。それは学校で受ける試験のようなもので、召しを受ける人の気持ち次第で落第することもあります。

数年前、私は海外から帰国する軍人を出迎えた時、軍隊にいた青年時代のことを思い出しました。私は故郷を離れて、4年間も従軍

していました。点数制が敷かれていて、海外滞在の月数や、実戦の回数ごとに点数が与えられ、得点の高い者から帰国が許されました。

もちろん帰国する者は多く、輸送船はいつも一杯の人で、私たちの最大の関心事は掲示板の点数を数えることだけでした。頑張ればいつか点数に達して、船に乗って我が家に帰れるのです。ある日掲示板の点数から、やっ自分も帰国できることが分かって主に感謝しました。

ところが、私は上官に呼ばれ、大阪へ行って欲しい、そしてそこで私を将校に任命したいと言われました。私は感情をぶちまけました。それは軍法会議にかけられてもおかしくない口のきき方でした。また、聖典の言葉も引用したように思います。上官は忍耐強く私の話を聴き、話が終わるのを待ってこう言いました。「確かに、その通りだ、パッカー君。しかし君に行ってもらうよ。」こうして私は大阪に転属になりました。

その日の午後、私は任務を受けた仲間たちとC-47に搭乗しました。私は席に着きながら、1、2週間で済む任務ではあるまい、まだ何ヵ月もかかることだろうと、顔をしかめて愚痴をこぼしました。「一体どうしてですか」と主に抗議しました。ただ家へ帰りたい一心でした。そのために祈り、そのために我慢もし、努力してきたのです。それがやっ自分の帰る番になったと思った矢先に、今度の任務です。

しかしどうしてかよく覚えていませんが、すぐに私は落ち着きを取りもどしました。今

考えてみると、その時主が祈りに答えて下さったのだと思います。その時の経験、そしてその後数ヵ月間の出来事から、私は現在の召しに対する備えとして大切な教訓を学んだのでした。私は遠い将来を見通すことはできませんでした。しかし、私たちは試練に遭うことによって、主の望んでおられる事柄に対する備えをすることができるのです。

支持する力

さて、穏やかな奇跡に伴う第三は、任命を受ける時に、力と靈感を授かり、この教会の役職に召された人がその責任を果たせるように支持する力を受けるといことです。主はご自分のことをよく知っておられ、こう述べておられます。「わが思いは、あなたがたの思いとは異なり、わが道は、あなたがたの道とは異なっている。」(イザヤ55:8)主が私たちに経験を与えられる時、私たちは心の中で不平を言うことがあります。疑いの気持ちを抱くこともあります。しかし、そこに奇跡があります。

クラーク副管長は次のように述べています。「この教会では、人は職を求めることも辞退することもなく、召された職に就く。」(Conference Report「大会報告」1950年10月)

信仰箇条にはこう記されています。「われらは、福音を宣べ、且つその儀式を執り行うためには、啓示と、権威ある者の按手により、神によって其任に召されねばならぬことを信ず。」つまり、権威ある者によって召されるかもしれないとか、ときどき召されることがあ

るというのではなく、召されなければならないということなのです。

しかし、世の人々はこのことを理解していません。教会員でも理解していない人がいます。いかげんに召しているようだと言う人は、正しいみたまの導きを受けていない人です。聖句に次のようにあります。「生れながらの人は、神の御霊の賜物を受けられない。それは彼には愚かなものだからである。また、御霊によって判断されるべきであるから、彼はそれを理解することができない」(Iコリント2:14) またこのように神聖な事柄について批判や皮肉や嘲笑がある時には決まってそこには不従順な気持ちがあることを私は知っています。皆さん、是非次の言葉を心に留めて下さい。

「われ命を下すに人これに従わずば、われ我約束を取消し祝福を与えず。

その時、人々心の中に言わん。こは主の御業にあらず、主の約束果されざればなりと。」
(教義と聖約58:32—33)

サモアのステーキ部を組織した時のことです。面接を受けに来たサモアの兄弟たちは皆素晴らしい人々でした。その中に白いワイシャツにネクタイを締め、腰にはラバラバをまとったはだしの支部長がいました。私は彼に、ステーキ部を組織するためにステーキ部長となる兄弟を捜していますが、だれが適任だと思いますかと尋ねました。すると彼はこう答えました。「ええ、知っています。私もそのことについて祈りました。そして、みたまの声によって、イオナ監督が私たちの新しいステー

キ部長になる方であることを知りました。」

彼の言う通りでした。しかし私は彼に口外されるのを懸念して、ほかにいませんかと尋ねました。

すると「ほかにはいません、彼だけです」と彼は答えました。そこで私はこう言いました。「もし彼が適当でなかったり、任命される見込みがないとしたらどうですか。ほかにだれかいませんか。」彼はしばらくそのままの姿勢で私を見詰めてから言いました。「バックー兄弟、あなたは私にみたまの証に逆らえとおっしゃるのでしょうか。」この素晴らしい兄弟はみたまを受けていました。私たちは皆みたまを受けることができます。そしてだれでも自分に与えられた召しにこたえることができるのです。

兄弟姉妹の皆さんに申し上げます。この教会は神の予言者によって導かれています。そして啓示の原則が実際に働いています。私たちは毎週世界各地を訪れて、その経験を得ています。そのことについてあまり多くを語りませんが、これも奇跡のひとつ、すなわち、信じる者に伴うしるしです。私たちがみたまの支持する力を心から感謝する気持ちをもてますように。

イエスは生きておられます。イエスはキリストです。私はイエスのことを証します。大勢の人が、イエスは天のかなたからいくばくかの影響を及ぼす御方だと教えていますが、しかしイエス・キリストは神の御子であり、御父の生みたまひし独り子です。そしてこの地上の僕たちの前にはっきりとそのみ姿を現わされたのです。

質 疑 応 答

本誌の回答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



ソルトレーク・エミグレーション
ワード部監督会第一副監督
フロイド・A・ジエンセン

◇ ◇

「監督を支持するということについていろいろ聞きます。支持するということはただ与えられた召しを受け入れる以外に、どういふことがあるのでしょうか。監督をどのように支持すればよいのでしょうか。」

「ただ与えられた召しを受け入れる」というのは、どういう意味でしょうか。支持することはとても大切なことです。人々が召しを

拒んだり、不承不承受けたりしたら、監督は孤独感を味わいます。また召しを受けたとしても、彼が本当にその仕事をしてくれるだろ



うかと心配しますし、心配が的中することもあります。自分のワード部で組織を背負って働いて下さる方々のことが思い出されます。そのひとりに、祭司定員会アドバイザーがいます。私たちは今まで彼に、集会に出て下さいと、こちらから催促したことは一度もありません。集会のあることを知れば彼は必ず出席します。彼の召しに関係した集会が沢山あるにもかかわらず絶対欠席しません。また、いつでも喜んで手伝い、2マイル行く精神で助けて下さっています。

そのほかにも、教会員はワード部に欠かせない様々な活動、たとえば神殿の仕事、ワード部の掃除会、親睦会、集会への出席など多くのことができます。今、私たちはレクリエーション・ホールのペンキの塗り替えをしていますが、手伝いに来ますよと日曜日に約束して下さい下さった方々が当日姿を見せないと、少しがっかりします。でも、先週も来て、今週も来て、来週も、そのまた次もきっと来てくれるという人々を見ると、とてもうれしくなります。そういう人々はいつでも楽しそうに働いて下さるのです。

ほかに非常にありがたいのは、定員会や補助組織の指導者が監督の決定を喜んで支持し、ワード部全体のことをまず第一に考えてくれることです。人は自分に任せられている自分の組織のことが一番先に来て当然ですから、

意に添わない決定を心から受け入れて、そのことのために働くにはかなりのものが要求されます。

個人的なことでは、私たちのワード部の監督は、会員から伝道中の子息のことを尋ねられるのがとてもうれしそうです。親元を離れて伝道するのがどういうことか知って、それを感謝してもらえることは、監督にとってなによりなのでしょう。もうひとつ彼にとってうれしいのは、プログラムはこうするともっと良くなるとか、聖餐会のこういうところがよいか、教会員からワード部のことを考えている様子がかがわれる時です。

私たちは、批判やうわさ話をしてワード部の指導者を悪く言うことを慎むことでも、監督を支持できます。監督は、陰口でワード部の力をそぐよりは、筋の通った苦情を直接自分に持ってきて欲しいと思っているはずで

監督と一緒に働くことは、すべての会員にとって素晴らしい経験です。私は自分のワード部の監督が立派な方であることをよく知っていますし、尊敬しています。しかし、それ以上に、私は彼を友達のように感じています。監督の仕事の量を見、彼がワード部の仕事に費やす時間の多さを知ると、できる限りのことをして彼の荷を軽くしてあげたいと、切に思うのです。

先祖の神

レニー・プール・ポーラス



「モルモンについて知るにはどうしたらよいかしら。」私はモルモンの知人にこう尋ねました。

「図書館に行ったらどうですか」というのが、彼の返事でした。

それで私は言われた通りに、近くの図書館に行き、ジョセフ・F・スミス著の「福音の教義」という本を借りました。

正直言って、私はその本をそれほど読みたいとは思いませんでした。でも、図書館にはモルモンについての本がほとんどなかったので、やむを得ずその本を借りたのでした。私はイエス・キリストの教え自体に迷っていて、とても別のことを知ろうなどという興味はありませんでした。私はユダヤ人でしたし、キリスト教徒は私にとって何とも不可解な存在でしかなかったのです。例えば、キリスト教徒はイエスは平和と愛の神であると公言しながら、2,000年間イエスのみ名によって、憎悪と破壊と流血という悪行の限りを尽くしてきました。もしもキリストが本当に愛と正義と善のひな型であったならば、なぜキリストの教える原則がキリスト教の真髄にならなかったのでしょうか。キリストを礼拝することによって、人類の兄弟愛が深まらず、かえって人々が互いに、憎み合うようになったのはなぜでしょうか。

私が『福音の教義』を読もうと思ったのは、霊的なものを期待したからではなく、ただ知的な好奇心が湧き、モルモンのことを知りたかったからでした。

そういうわけで私はその本を読み始めました。ところが一読した瞬間から、私は神の存在を身近に感じたのでした。この本では、私の先祖の神、すなわちアブラハム、イサク、ヤコブの神は触知できる実在の御方であると

説かれていたのです。私はすぐに分かりました。知と情の両方ではっきりと確信したのです。「これこそ真理だわ。愛と平和だわ。やっと見付けたわ。」まるで私の生命に強い光が射し込んで体中を照らし出されたような気分でした。いや、私だけでなく、宇宙全体が、神が生きておられ、子供たちの一人一人を深く気遣っておられるという喜びで満ちているような気がしました。

私はこの『福音の教義』の一部を読んだだけで、神に近づくためにはこの真理を学んでそれに従うしかないと思いました。

でも、どうすればもっと知ることができるのかしら。考えられる方法は、著者が引用している本を読んでみることです。しかし『インブルーメント・エラ』や『大会報告』、『ジュービニル・インストラクター』、『デゼレト・ウィークリー・ニューズ』、特に『教義と聖約』という本はどこにあるのでしょうか。

その時ふと心の中にこの辺りにもモルモン教会があるはずだ、その人に聞けば分かるに違いないという考えが浮かびました。電話帳の黄色いページから「教会」のところをめくり、末日聖徒イエス・キリスト教会が私の自宅から車で20分程の所にあることを知りました。

その時、私はすでに結婚していたので、夫に頼んでモルモン教会に連れて行ってもらいました。教会堂の玄関に、十字架がかかっていることだろうと考えたことを今でもよく覚えています。中に入り、教会堂が温かい親切そうな人たちで一杯なのを見た時、本当にうれしい気持ちになりました。日曜学校の礼拝では、長い旅行からやっと家に帰ってきたような気がしました。

礼拝行事の後、クラスがあることを知らさ

れ、私たち夫婦は、後で知ったのですが、求道者クラスの部屋に案内されました。その日のレッスンは教会の組織についてでした。話が監督の職務のことになった時、恐らく私たち夫婦のことを考えて言って下さったのだと思いますが、監督とはラビのような人だと教師の方が説明しました。その後で教師が私たちに集会所を案内して下さったので、私はこう申し上げました。「失礼とは思いましたが、あなたの教会の監督はラビとはまったく違います。ラビはただの教師ですが、監督は神の権能をお持ちです。」

私は、自分の口から出たその言葉に驚いてしまいました。でも、それはほんの手始めに過ぎませんでした。自分自身いつそのようなことを知ったのか見当が付きませんでした。確かに「福音の教義」は読んでいましたが、わずか2日間の読書で、543ページ(英文)もの新しい思想や概念を吸収できるはずはありません。後日、知識を理解に変えるには心の奥底で感じることを、すなわちたまの確認が必要であることを知りました。

その日は断食証会という集会がありました。が、私たちはそれには出席しませんでした。今思うと、知恵と愛をお持ちの主が帰るよう導いて下さったのだと思います。主は、私がまだイエスをキリストとして受け入れるには早過ぎることを知っておられたのです。私は証会には出席しませんでした。が、それでも、「福音の教義」の中で読んだことと、この教会に来て知ったことが、自分の長い間捜していたものであることをはっきりと知ることができました。そして、いかげんな好奇心や珍しさからではなく、何かよく分かりませんが人生の本質みたいなものを知るためにはこの教会へもどって来なければならないと感じた

のでした。

その最初の日曜日、私はなんと説明したい複雑な気持ちで教会を後にしました。なんとかそれに近い言葉で言い表わすとすれば、神からほほえみかけられ、その温かい笑顔に包み込まれているような気持ちでした。私は、教会から『モルモン経』、『奇しきみわざ』、『大背教』、『基督イエス』、『教義と聖約』など、数冊の本とパンフレットを持って帰りました。

『大背教』という本の中に「諸事実を公平無私に理解してゆくために、そこから正しい真実の結論を引き出すことを忘れなければならない」と記されていました。

その通りです。それまで私はその著者の言葉が、ほかのキリスト教徒の著書と同じように一方的で偏見に満ちたものだと思っていました。というのはイエスについて書かれた書物はほとんどと言ってよいほど、忠実に裏付けられたものではなく、キリスト教徒のあと知恵に基づく見解によって書かれていたからです。

私は素直に受け入れることができませんでした。すぐにでも、これまで見聞きしたものの一切を捨ててしまおうとも思いました。しかし、清らかな愛が心に感じられ、そう簡単には無視できなくなりました。それで、私は気乗りのしないうちに、本を読み続けました。すると2、3段落程読んだ時でしょうか。私はまったく突然に、人類の罪を引き受けるために地上に来たイエスというひとりの人間に対する著者の大きく深い愛を心に感じたのです。なおも読んでゆくにつれ、私は、救い主を愛する著者の愛に強く胸を打たれ、イエスがキリストであることをはっきりと受け入れられるようになりました。その時私は贖い

主に対する深い愛を感じ目に涙がにじんできたのでした。

しかし、その喜びは同時に苦しみでもありました。それは、これまで一番苦しかった時でさえも経験しなかったような苦しみでした。そして、私は間違いなく、末日聖徒イエス・キリスト教会が神のまことの教会であり、そこにこそこの地上の人間が神から賜わったすべての真理と教えがあることをはっきり知ったのです。しかし一種の甘えから、この教会の会員になるとしても自分の宗教の基本的な教えを捨てる必要もないだろうと考えたのです。ユダヤ教の中の真理や正義、道徳的、霊的に良いものは、モルモン教会の教えでもちゃんと生きていました。

でも、それでよいもののでしょうか。私はそのことを深く考えてみました。考えているだけでどうしてモルモンになれるのでしょうか。私の祖父母やおじ、おば、いとも第二次世界大戦のユダヤ人大虐殺で死んでいます。彼らの死、そのほか600万のユダヤ人の死はむだだったのでしょうか。私がかもここで、イエスはキリストですと公衆の面前で告白すれば、事実上、彼らの死はむだ骨でしたと宣言することになりはしないのでしょうか。過去何世紀にもわたって、ユダヤ人は自分たちの信仰を曲げないからという理由で、激しい迫害と恥辱を受けてきました。拷問を受け、焼き殺され、皮を剥がれ、法律の保護もなく国から国、町から町へ追われました。このような行為はすべて、イエス・キリストに仕えると主張する人たちによって、引き起こされてきたのです。

異国の、残忍な人々の中であってユダヤ人たちをひとつに結んできた信仰、その信仰の基を、そして同胞たちを、どうして見捨てた

り、否定したりできるでしょうか。

私は家族や自分の先祖との思い出をいつも心の中で大切に育んできました。ユダヤ教も大切にしました。しかし私はすべての愛の源が何であるかを知り、しかもそれを完全に享受するためには、モルモンになる以外にないことを知ったのです。それでも私は先祖の信仰を否定することができませんでした。ユダヤ人が彼らなりに彼らの神に仕えてきたことを、どうしても否定することができませんでした。

そのような葛藤に悶え苦しむ私の心に突然光が射し、ひとつの音が響いてきました。私は柔らかな光に包まれ、ほかには何も見えませんでした。ただ私は光の中に立ち、声を聞いているだけでした。自分の思いがイエスに通じているように感じ、私はどうしたら大きなジレンマから抜け出ることができそうですかとイエスに尋ねました。

そして私は知ったのです。イエスのご自分が旧約聖書のエホバであり、先祖をエジプトから導き出した御方であり、「私たちの先祖の神」であることを直接に教えて下さったのです。私たちは再び家族全員に会えることも知りました。私が尋ねると、イエスは優しく、親切に答えて下さいました。どのようなことでも分かりやすく、そして易しく説明して下さいました。

イエスはほかの問題についても述べ、私の心に語り掛けて下さいました。私たちに教えたいと思っておられる偉大な事柄のしるしについてもいろいろと説明して下さいました。主は私がかはっきりと理解できる言葉と観念を用いて、簡潔明瞭にしかも麗しく説いて下さいました。何と深い愛で、私の悩みと疑惑を解いて下さったことでしょう。

次の日曜日、今度は私ひとりで教会に行きました。主のまことの教会の会員になること以上に重要なことはないかと心に決めていました。私はできるだけ多くのことを学ぼうと思いました。主は私が読んだ一つ一つのことについて私の心を開いて下さいました。当時私はキリストの光や聖霊の存在について何も知りませんでした。しかし自分がすっかり変わってきたのが手に取るように分かりました。

私は何年もの長い間、絶望の暗闇を歩いてきて、その時やっと、それまで知らなかった光と何か温かいものを感じたのでした。たとえば、自分の生活がこれまで以上に厳しい立場に置かれたとしても、心の持ち方、考え方そして応じ方は以前とはまったく違ったものになっているはずです。以前は失望しかなかったところに希望が生まれ、恐れしかなかったところに勇気が湧いてくるのを感じました。そして苦悩があったところに喜びが、混乱と混沌しかなかったところに平安が訪れました。

ある日、教義と聖約の第50章を読んでいて、その6節に目が留まりました。「されど人に欺く者や偽善者たちは禍なるかな。そは、われ彼らを引き出して審かんと言いたまえばなり。」

私は考えました。自分は偽善者ではないだろうか。心と精神を尽くして、真剣に真心から末日聖徒になりたいと望んでいるだろうか。自分の利益になるからと言うことではなく、主と隣人に仕えたいという望みから教会員になりたいと望んでいるだろうか、と。私はこれまで何度も、自分では誠心誠意正直に行なったつもりでも、後になってみるとその動機が自分で考えたほど清くはなかったことを経験してきました。しかし、末日聖徒になるといふことなので、正直、真実、清さが完璧で

なければならないと思いました。私は心の中でよくよく思い計り、自分に完全な確信があるかどうか自問してみました。

その晩のことです。私は目を覚まして、タバコに手を伸ばしました。タバコを吸うことは長年の習慣で、ここ数年はその量も一段と増えていました。私がタバコに手をやると、心の中にこんな思いが湧いてきました、「どうしてタバコを吸うの？」

私は心の中で反発しました。「どうしていけないの。私はまだモルモンではないのよ。」

その時、ひとつの思いが私の心を強く打ちました。「あなたも偽善者と呼ばわれたいのか。モルモンでないからタバコはやめないだって、……。教会のすべての教えが真実であることを知っているなら、タバコはやめるはずだ。」

私はタバコを置きました。その時から、タバコは一切口にしていません。お酒もコーヒーもお茶も飲んでいません。そのような勇気を与えて下さった主に、心から感謝しています。

私が教会員になってからこの3年間に、主は数多くの祝福を与えて下さいました。中でも、最大の祝福は、イエスがキリストであり、末日聖徒イエス・キリスト教会は今日この地上における唯一まことの教会であるということとを心の奥底で確信することができたことです。

(レニー・プール・ポーラス；ブリガム・ヤング大学教育学助教授、ユタ州プロボ・シャロン・イーストステーク部プレゼントビュー第3ワード部扶助協会訪問教師の責任にある。)

愛のおくりもの

あい
愛のおくりものって何ですか。世
かい 界で、初等協会のこどもたちは
しよとうきようかい
ど愛をはこんでいるこどもたちはい
あい
ないでしょう。1878年に、初等協
ねん 会
しよとうきようかい
会ができてからずっと、初等協
しよとうきようかい
会のこどもたちは人々にすすんで奉仕して
ひとびと きました。

はじめのころ、こどもたちは畑をた
はたけ
がやし、豆を作つってそれを監督の倉
まめ つか かんとく ぞう
こ 庫におさめました。

じゅうたんのはぎれをぬい合わせ
て、マットをつくり、ソルトレーク
しんでん
神殿におくりました。また、その糸
いと
をかうためにお手伝いをしてお金
かね
をためました。

かいたくしゃ
開拓者がソルトレークの谷につい
たに
てから100年目の年には、それを記
ねん め とし
念して各地の初等協会で教会や町の
ねん かくち しよとうきようかい きようかい まち
公園に木を植えました。

また、初等協会小児病院も建てま
しよとうきようかいしやうにびやういん た



した。この病院はこどもたちのため
の病院で、こどもたちの誕生日献金
によって建てられたのです。今では、
この病院は教会の手をはなれていま
すが、献金だけは今でもおこなわれ、
全世界のこどもたちが治療を受けら
れるよう助けをあたえています。

そのほかにも、初等協会のこども
たちは、いろいろな機会をとおして、
あたえること、分かち合うことの喜

びを学んでいます。たとえば、「明る
い少女」のクラスでは、「善行」リス
トをつくって、人のためによいこと
をするようにしています。

それらはすべて、こどもたちに、
「わたしの兄弟であるこれらの最も
小さい者のひとりにしたのは、すな
わち、わたしにしたのである」(マタ
イ25:40)の意味を知ってもらうた
めなのです。



きつねと



おなかをすかしたきつねが、ぶどう畑ぼたけをのぞいています。きつねはいました。「何て、おいしそうなぶどうだろう。そうだ、なか中はいに入いって、おなかがいっぱいになるまで食たべてやろう。」

ところがそばまできてみると、畑はたけは高たかいへいに囲かこまれています。きつねはへいのまわりをうろうろしながら、においをかいだり、土つちをひっかいて入口いりぐちをさがしました。そして、とうとうひとつのあなを見つけたのです。けれども、いざ中なかに入はいろうとすると、あなが小ちいさすぎて入はいれません。

ぶどう畑

ドロシー・レオン

こまったきつねはいました。

「ぶどう畑さん、ぶどう畑さん。あなたのぶどうは何ておいしそうなんでしょう。そのぶどうをすこしわけてくださいませんか。ぼく、はらぺこなんです。」きつねは悲しそうにいました。「おねがいです。どうしたら中に入れるか教えてください。」

「そんなにぼくのぶどうがほしかったら、じぶんで考えたらいいだろう」と、ぶどう畑はきつねにいました。

きつねはもういちど、やってみまし

たが、やっぱりだめでした。あなが小さすぎるのです。

きつねは頭をかかえて、考えました。そして、からだがあなを通れるようになるまで、何も食べないでまつことにしました。

ようやく、きつねはぶどう畑の中に入り、三日三晩も、あまいあまいぶどうをたらふく食べたのです。

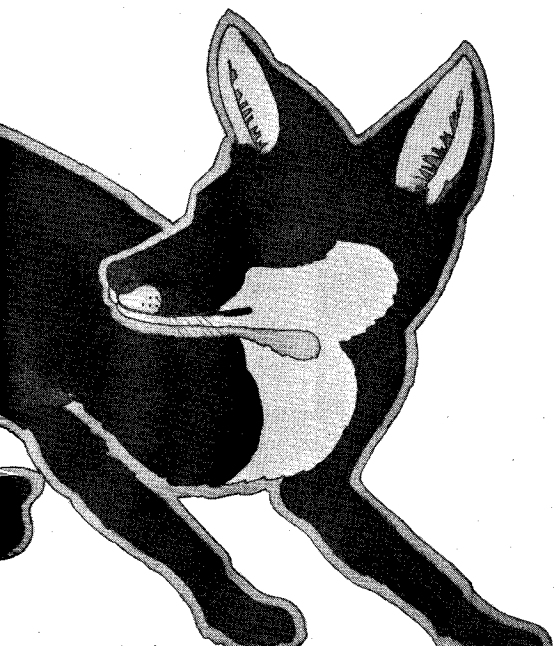
さて、おなかもいっぱいになったし、そろそろじぶんのねぐらに帰ろうかとおもって、あなのところにきたのです。ところがどうでしょう。こんどはひとりすぎて、そとにでられません。

きつねはいました。「ぶどう畑さん、ぶどう畑さん。あなたはなんてひどいんでしょ。私にぶどうを食べさせておいて、家に帰れないようにするのですか。」

ぶどう畑は答えました。「いいや、それはちがうよ。何もしないで、人のものをもらって帰るなんて、すこしかってすぎやしないかい。」

きつねはまた考えました。もういちど、あなからでられるようになるまで、じっとそこで待つしかなかったのです。こうして、きつねはようやくぶどう畑の外に出られました。

けれども、おなかは入ったときと同じようにぺこぺこでした。



ほんとうのお友だち



七十人第一定員会会長会
ポール・H・ダン

ちい
小 さなお友だちのみなさん、これか
ら、世^よの中^{なか}で一番^{いちばん}すばらしい祝福^{しはくふく}

についてお話^{はなし}したいと思^{おも}います。それ
は、救^{すく}い主^{ぬし}のこ^{こと}を人々^{ひとびと}に教^{おし}える宣^{せん}教^{きょう}
師^しになること^{こと}です。みなさん^{みなさん}はべつに
おとな^{おとな}になるまで待^まつこと^{こと}もな^ないので
す。今^{いま}すぐ^{すぐ}にでも宣^{せん}教^{きょう}師^しにな^なれます。

わたし
私^{わたし}たち^{たち}の予^よ言^{げん}者^{しゃ}、スペンサー・W・キ
ンポール大^{だい}管^{かん}長^{ちやう}は、「すべ^{すべ}て^ての教^{きょう}会^{かい}員^{いん}は、
宣^{せん}教^{きょう}師^しである^{である}」と言^いって^います。これ
は、おとな^{おとな}だけ^{だけ}でなく、子^こども^{ども}にも言^い
えること^{こと}です。みなさん^{みなさん}は、さっそ^さく
きょう^{きょう}からでも宣^{せん}教^{きょう}師^しにな^なることがで
きます。その方^{ほう}法^{ほう}を教^{おし}えま^ましょう。

まず第一^{だいいち}に、人々^{ひとびと}によ^よいも^もは^はん^んを^を示^し
すこと^{こと}です。人^{ひと}は、教^{きょう}会^{かい}員^{いん}のよ^よいも^もは
ん^んを^を見^みて、教^{きょう}会^{かい}に^に関^{かん}心^{しん}をも^もつよう^{よう}にな
ります。だ^だい^いぶ^ぶ前^{ぜん}の^のこと^{こと}です^{です}が、ジェ
シカ^{しやうじよ}とい^いう^う少^{せう}女^{にょ}が^が教^{きょう}会^{かい}員^{いん}で^でない^{ない}お^お友^{とも}だ
ち^ちを^を家^{いえ}によ^よん^んで、いっ^いっ^っし^しょ^ょに^に遊^{あそ}ん^んで^でい
ま^ました。その^{その}う^うち、ひ^ひと^とり^りの^の子^こが^がお^お父^{とう}
さん^{さん}の^の悪^{わる}口^{くち}を^を言^いい^いは^はじ^じめ^めま^ました。ジェ

シカは、思いきってお友だちにやめるよめに言いました。「私は、自分のお父さんやお母さんの悪口を言ったりしないわ。」お友だちはなぜそうしないのかたずねてきました。そこで、ジェシカは、教会のことを話してあげました。

あるとき、イエス様はこうおっしゃいました。「そのように、あなたがたの光を人々の前に輝かし、そして、人々があなたがたのよいおこないを見て、天にいますあなたがたの父をあがめるようにしなさい。」(マタイ5:16) イエス様は、私たちがどこにいても、もはんを示しなさいとおっしゃっています。

次に、みなさんができることは、できるだけ多くの人とお友だちになることです。自分からすすんでお友だちになって教会にさそってください。だれでも、知らない人たちの中には入っていきにくいものです。でも、なかよしのお友だちがいれば、もっと安心して入っていけるはずだと思います。私は、そのことを自分の娘から学びました。

娘が新しい学校へ転校したときのことです。学校の始まる日が近づくにつれて、娘は学校に行くことが心配になってきました。私たちは娘を勇気づけ

たのですが、当日の朝になっても、娘は先生やお友だちと会うのをこわがるほどです。そしてとうとう、「きょうは学校へ行きたくないの」と言い出しました。

私は娘を学校まで送ることにしました。学校に着いても娘はいっこうに車からおりようとしませんでした。私は娘を車からおろし、いっしょに玄関の方に歩き出しました。よほどこわかったのでしょうか。娘は、私の足にぎゅつとしがみついてはなれないのです。

ところが意外なことが起こったのです。そばを通りかかったひとりの少女がこわがっている娘を見て、声をかけてくれました。「おはよう、ケリー。いっしょに行きましょう。」たちまち娘は私の手をふり切って、その少女と手をつないで教室の方に走っていきました。

「お父さん、もう帰っていいわ。いなくてもだいじょうぶだから。」

子どもはすぐ、だれとでもなかよしになれます。これは、神様が子どもたちにあたえてくださっている賜です。初等協会や日曜学校に、お友だちをさそっていっしょにくるようにしてください。みなさんも、きっとすばらしい宣教師になれます。

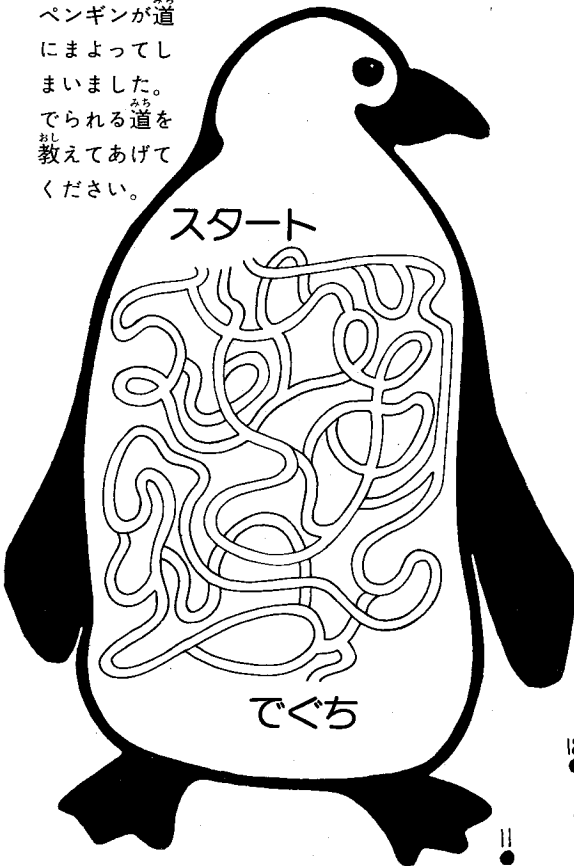


おもちゃばこ

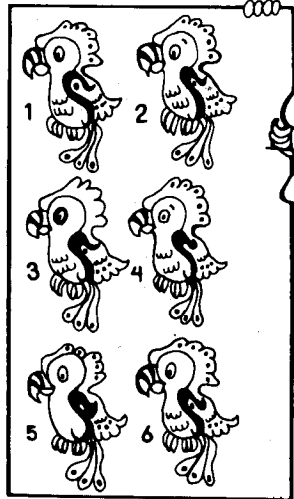


ペンギンが道
にまよってし
まいました。
でられる道を
教えてあげて
ください。

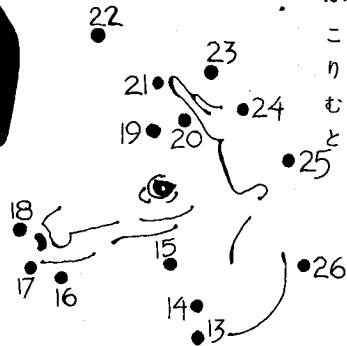
スタート



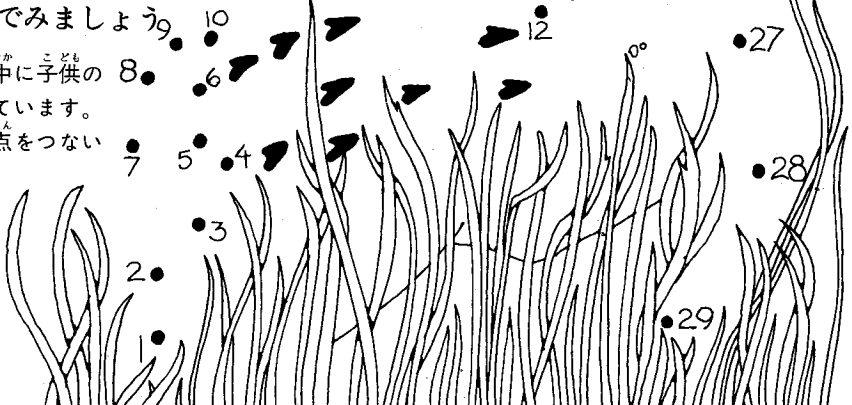
でぐち



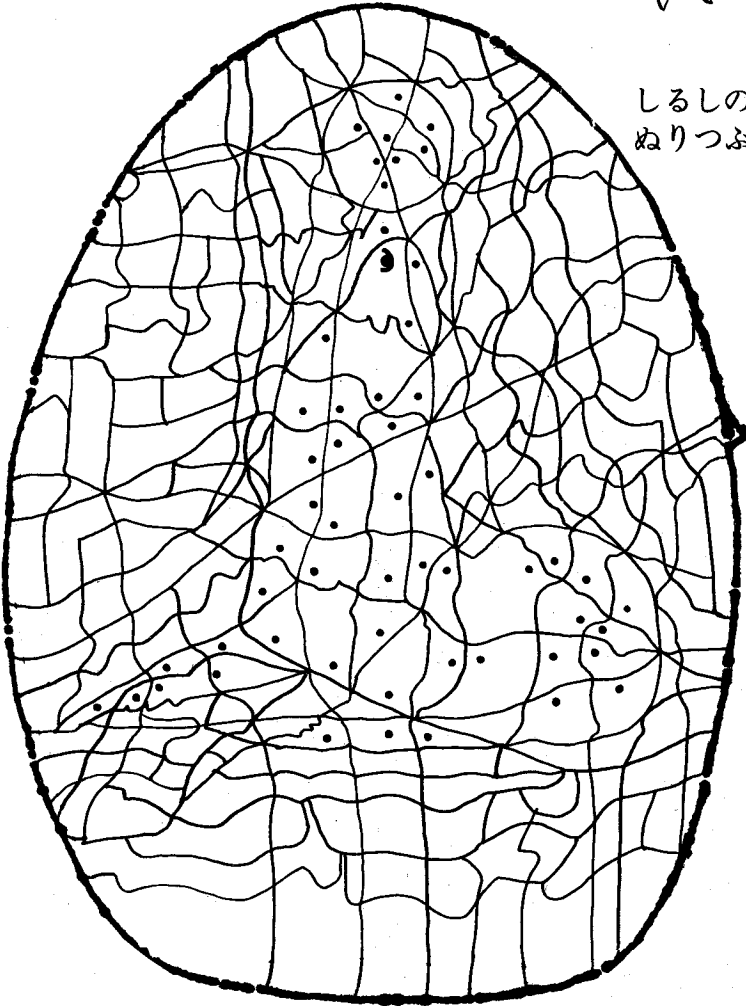
ふたごのおうむ
この中に、そっく
りのふたごのおう
むがいます。どれ
とどれですか。



点を
つないで
みましょう。
おお
きなやぶ
の中に
子供の
動物が
かくれ
ています。
じゅん
ぱんに
点を
つない
で
みましょう。

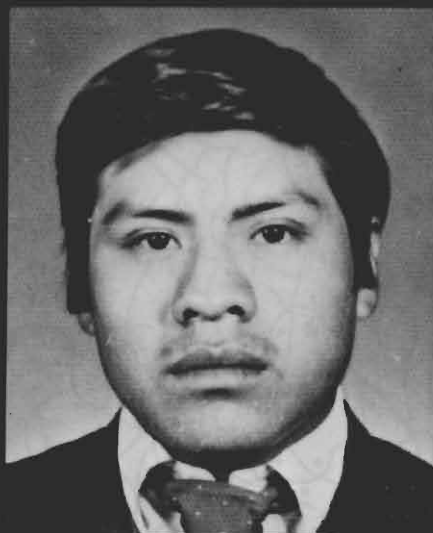


てん
点をつないでみましょう



しるしのところを
ぬりつぶしてみましょう

ダニエル・チョク



このカチャケル・インディアン初の宣教師の
一生は、まさしく献身の生涯であった

カート・ハーマン

私は現代のニューフェイスを知っている。グアテマラのカチャケル・インディアンのダニエル・チョクこそその人である。私が彼と初めて会った時、彼はグアテマラのグアテマラ・シティ伝道部で働いていた。私の知る限り彼は、最初のカチャケル・インディアンの宣教師である。彼の任地からほんの48キロの所に故郷の小さな町、バトシシアがあり、農夫の父親はそこで支部長をしていた。伝道地は家からは近かったが、ダニエルとその家族にとって伝道費用を捻出することは決して楽ではなかった。父の年収は100ドルから200ドルしかなかった。それでもダニエルが愛する主に仕える召しをいただく19歳の年齢に近づいた時、家族は一心に祈って90ドルを2年間の伝道費用に充てることにした。家族の全収入のおよそ4分の1である。

そのほかにも、ダニエルが克服しなければならないことは多くあった。まず服装はえりのある服にネクタイをつけ、靴を履き、食事も豆やトーチラスや米は食べられない。しかし彼はそのような新しい環境にすぐ順応することができた。それというのも、彼は同胞に福音を教え、祝福をもたらすこと、さらに宣教師たちに難しいマヤ方言を教えることを心から望んでいたからである。

チョク長老は教える才能に恵まれており、驚くほど熱心に働いた。力強く、愛と信仰をもって教え、証を述べ、彼から学んだ人はいつも心に大きな喜びと満足を得ることができた。彼は福音を分かりやすくかみ砕いて教えた。たとえ反対者の中にあっても、彼が怒ったり、取り乱したりすることは一度もなかった。彼はいつも人々を愛し、人々から愛された。

1976年私は伝道を終える前に、もう一度チョク長老と出会うことになったが、それがこの世での見納めであった。その経験を通

して、私は主を信じることは一体どのようなことなのか、人生とは何なのかを知ったのである。そしてこの素晴らしい長老が自国民に対して抱いていた熱意を改めて知ったのである。

1976年2月4日の朝であった。グアテマラの中部高地一帯に、これまで中米を襲った中でも最大級の地震が発生し、24,000人を越える人命が失われたのである。

地震が治まると、私と同僚は中部高地の教会員やそこで伝道している宣教師たちの安否を尋ね、ソルトレーク・シティに報告するように求められた。私たちは幾つかの町を訪れ、途中チョク長老と同僚に出会った。彼らは午前中ずっと自分たちが伝道していた地域のけが人や死亡者の世話をし、ようやくそれを済ませて、これからチョク長老の故郷であるバトシシアの町に向かうところだった。そこで私たちも彼らと合流することにした。

4人がチョク長老の家に着くと、彼の父親はうつろな目をし、重い足取りでがれきの山の間を歩いていた。チョク長老は駆け寄って父親を抱き締めた。しばらくの間ふたり共声が出なかった。それから父親は重い口を開いて、妊娠8カ月の妻がふたりの息子と共に地震で倒れた壁の下敷きになって死んだことを告げ、一緒にその場に泣き崩れてしまった。

チョク支部長の悲しみは大きく、ショックは測り知れない程であった。一緒に泣いていたチョク長老はようやく気を取り直し、父の顔を見詰めて言った。「お父さん、神殿に入るために20年間犠牲を払ってきたことを覚えているでしょう。ぼくたち、永遠に結び固められてるんですよ。みんな、また一緒に住めるんですよ。ぼくはそのことをよく知っています。お父さん、主はこれまでお父さんに祝福を与えて下さったでしょう。お父さんはこの主のぶどう園で働く僕です。悲しんでいる人たちの手を取って、慰めてあげて下さい。

みんなを集めて一緒に祈ったらいかがですか。」

それから、チョク長老は昔のニーファイが荒野で指導者であるリーハイを励ましたように、「お父さん、ぼくたちが信仰を働かせることができるように助けて下さい」と言った。

(こうしてチョク支部長は支部の会員をまとめ、大規模な救援と復興の事業に取り掛かった。以来、彼は周囲のすべての人々にとって大きな支えとなったのである)

チョク長老は自分の家族や友人の手助けを終えると、開口一番こう言った。「さあ、行きましょう。今夜までにソルトレークに報告するためには、まだまだしなければならぬことが沢山あります。」

私は彼の言葉にいささか驚いて、ほかの町のことは自分たちで調べるから彼はここにどまった方がよいと言った。

しかし彼の返事はこうだった。「もう父ひとりで十分です。私の召しはあちこちにいる聖徒や長老たちを助けることです。どうか行かせて下さい。」私たちは彼の熱意に負けてしまった。

すでに日は暮れかかっていた。それでもまだ町が3つ残っていた。そのうちふたつは地震による被害で道路が使えなかった。そこで私たちは二手に分かれることにした。チョク長老と私はコマラパへ行くことになった。彼は、少しでも早く町に着きたいので、走ろうと言いつ出した。約18キロの道のりをである。

私は冗談だと思っていた。私たちは峡谷を通ることになったが、そこは地震による山崩れで土砂が落ち、危険な状態になっていた。

私は峡谷を避け、回り道をした方がよいと言ったが、地理に詳しいチョク長老は走って峡谷を抜ける以外に町には着けないと言いつきかなかった。そして、主の助けがあれば必ずできると言った。さらに、体力と気力が続くように、また峡谷が危険なために孤立状態におかれているコマラパの人々に特別な祝

福があるように、私に祈ってほしいと言った。私は心から謙遜になって主に祈った。

私たちは18キロを走り通した。走りながら、私たちは主が古代アメリカの民に語ったみ言葉を何度も繰り返した。彼はこれまでその言葉を心の中で深く考え、その言葉の意味をもっとよく知りたいと思っていると語った。

峡谷の町に着いてみると、辺りは物音ひとつしないほど静まりかえっていた。その日ずっと町は重苦しい空気に包まれたままだった。私たちはコマラパで必要な救援活動を始め、情報を集めてパトシシアに引き返した。そして、チョク長老はそのまま父と生き残った家族のもとに帰った。

それ以来、私はチョク長老に会っていない。しかし、あれからずっと、この若い偉大なカチャケル・インディアンのことが私の頭から離れない。私は彼から大きな感化を受け、あれ以後、私は変わった。チョク長老を知ってからの私の福音に対する証は百倍も強くなったように思う。実に彼は「神の命令を守り、その父にならって道をふみ行った」(ヒラマン3:37)人である。

1976年3月30日、チョク長老は60名の宣教師と共に、荒廃したバツーンの町の後片付けをしていて、余震で崩れ落ちたレンガが壁の下敷きになって亡くなった。

私は彼の死を素直に受け入れることができなかつた。しかし同僚のジュリオ・サラザール長老は彼の葬儀で次のように述べた。「私は、チョク長老がパトシシアの立派な指導者となる日を夢に描いていました。ですから、彼の死に納得できませんでした。でも、なぜ彼が死んだのかとよくよく考えた時に、恐らく彼に準備ができていたので、主は、霊界での仕事、特に地震で亡くなった大勢のカチャケル・インディアンの福音を宣べ伝えるために彼を召されたことに気付いたので。」

伝道が若人に及ぼす影響

オルソン・スコット・カード

帰環宣教師を対象に行なわれた最近の調査結果から、伝道が若人の生活に大きな影響を及ぼしていることが明らかになった。教会の集会への出席、大切な戒めを守っているかどうか、教会の奉仕などについて、1,000人を超える帰環宣教師にアンケートの回答を求めたところ、興味深い結果が得られた。

帰環宣教師の97パーセントが月に1回以上、91パーセントが3回以上聖餐会に出席している。これは教会全体の出席率をはるかに上回っている。

帰環宣教師の89パーセントが、現在教会で何らかの責任を受けている。

帰環宣教師で結婚した人の内95パーセントが神殿結婚であり、これも教会の平均をはるかに上回っている。

なぜこのような調査が行なわれたのだろうか。七十人第一委員会会員であり、伝道管理部の管理部長を務めるカーロス・E・エイシー長老は、近年教会員の間で帰環宣教師が不活発になる比率が高くなっていると言われていたことを指摘し、次のように語った。「ひとりかふたりの宣教師が教会を離れることだけでも非常に重大なことなのに、それほど大勢の人たちが不活発になっているとはとても信じられません。」そこで、そのような問題が本当にあるのかどうかを調べ、もしなければそのような事実無根のうわさが流されないようにするため、伝道管理部のエリック・オットー兄弟と神権管理部のジョン・マドセン兄弟のふたりが中心になって調査が実施されたのである。

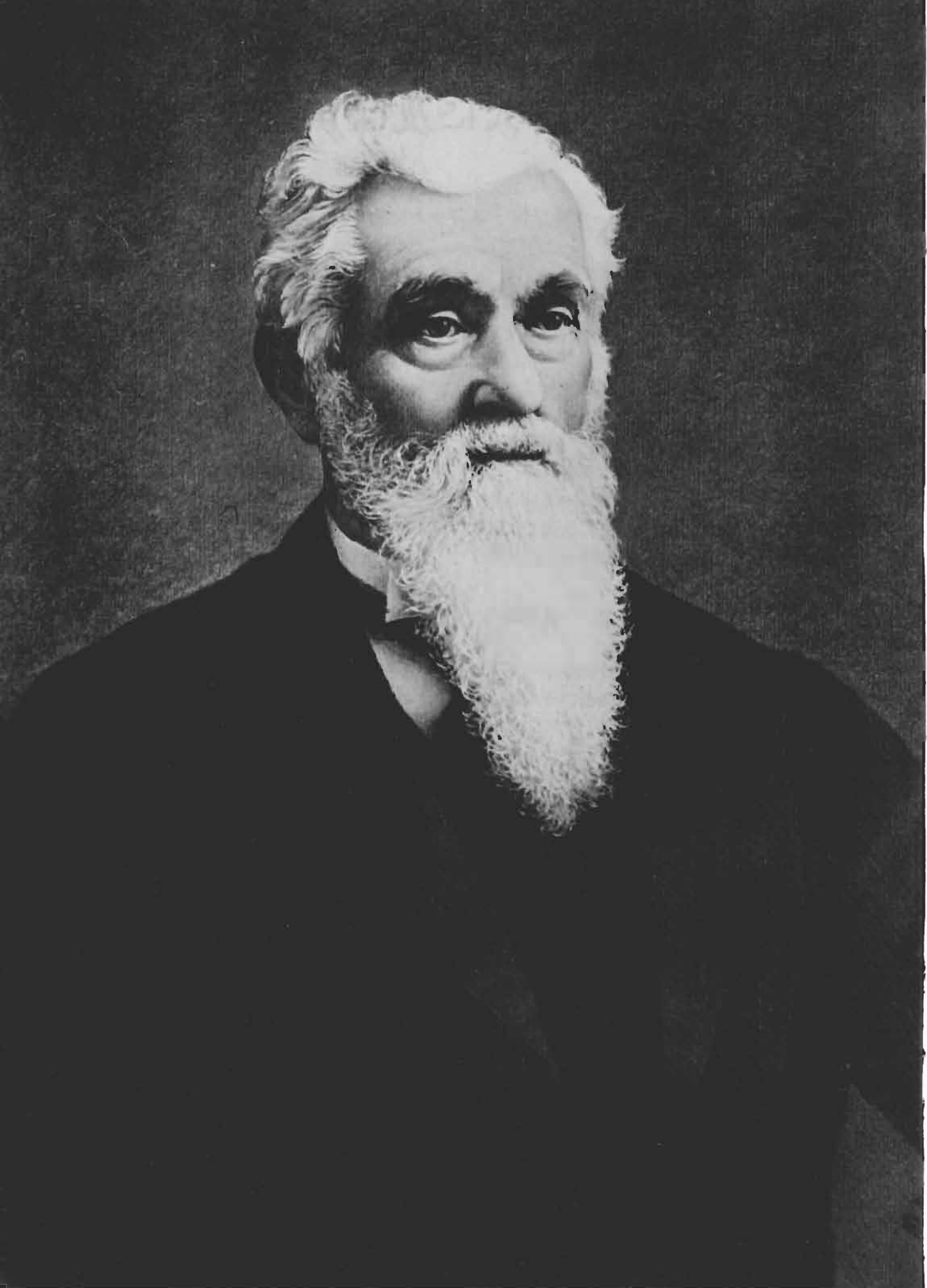
アンケート用紙が1,757名の帰環宣教師に郵送され、回答率は65パーセントを越えた。

これは郵送アンケートの回収率としては非常に高い。しかもさらに正確を期すために、帰環宣教師15人ごとにひとりの監督をお願いして、宣教師の自己評価と監督から見ての評価との違い、および回答者が未回答者と比べて活発な人だけになっていないかどうかを調べた。

この追跡調査の結果、先の調査が真びょう性の高いものであることが証明された。未回答者は多少不活発な傾向はあるが、その差は3パーセントという無視し得る数字であった。

現在の帰環宣教師は非常に活発で、しかも彼らは40年前の宣教師をはるかにしのいでいる。1930年頃行なわれた宣教師の調査では、帰環宣教師の内、十分の一を多少でも納めている者が84パーセントであったが、今回の調査では完納者が92パーセントにも達している。また、1936年には83パーセントの帰環宣教師が集会に活発に集っていたが、今日ではその比率は91パーセントに上り、月に1回以上出席している者も含めれば97パーセントになる。

しかし比率が高いからと言って手放しで喜んではいられない。エイシー長老は次のように語っている。「調査結果は、私の期待をわずかに上回っているに過ぎません。私は当然良い結果が出ると思っていました。私たちは宣教師全員のことをいつも心に掛けています。たとえ少数とはいえ、彼らが教会に来ないことは非常に悲しいことです。私たちは91パーセントや97パーセントでは満足できません。帰環宣教師が100パーセント活発で忠実な末日聖徒になって欲しいというのが私たちの願いです。」



律法に従ってはじめて得られる 福音の祝福

第5代大管長
ロレンゾ・スノー
(1814—1901)

末 日聖徒イエス・キリスト教会の第5代大管長ロレンゾ・スノーは、1814年4月3日、オハイオ州マンチュアに生まれた。ロレンゾ・スノーは、カートランドで教師をしていた姉のエライザの勧めに従い、オハイオ州カートランドでヘブライ語を学ぶことになった。その旅の途中、彼はデビッド・W・パッテン長老に出会い、福音の教えを受けた。そして、1836年6月、ジョン・F・ポイントン長老からカートランドでバプテスマを受けた。

翌年の春、ロレンゾ・スノーは最初の伝道に召され、財布も袋も持たずにオハイオ中を旅した。そのほか英国にも伝道に行き、ビクトリア女王にモルモン経を献上している。また、イタリア、スイス、ハワイでも福音を宣べ伝えた。

1849年2月12日にスノー長老はソルト

レーク・シティーで使徒に聖任された。そして、ウィルフォード・ウッドラフ大管長の死後間もなく、大管長として支持された。時に、1898年9月13日のことである。スノー大管長は、主のみこころに従って、什分の一の律法を改めて強調した大管長としてよく知られている。彼の説教や著作物はいずれもこの世における人の価値と、永遠における人の可能性を強調するもので、そこにはスノー大管長の無限の信仰が浮き彫りにされている。スノー大管長は、1901年10月10日ソルトレーク・シティーで世を去った。

この話は、1879年4月7日(月)ソルトレーク・シティーにおける総大会で語られたものであり、*Journal of Discourses* (『説教集』第20巻, pp. 187—92) からの抜粋である。

「アブラムの九十九歳の時、主はアブラムに現れて言われた、『わたしは全能の神である。あなたはわたしの前に歩み、全き者であれ。』」（創世17：1）

これに関連して、山上の垂訓の一節を引用したいと思う。マタイ伝5章の最後の節にはこう記されている。

「それだから、あなたがたの天の父が完全であられるように、あなたがたも完全な者となりなさい。」（マタイ5：48）

この朝のひとつきを、皆様の信仰と祈りに心を向けてみたいと思う。

御存じのように、主はアブラハムにみ姿を現わし、偉大な約束を与えられた。同時に、それを受けるために、アブラハムにひとつの条件を授けられた。それは、主のみ前にあって完全な者になるということである。この同じ条件を主は弟子たちにも示され、ご自身と天の父が完全であられるように、彼らも完全な者となるよう勧められたのである。

主は最高の祝福を末日聖徒に授けると言われた。しかしその祝福を受けるためには、私たちはアブラハムのように、それにふさわしく自らを備え、かつてアブラハムに与えられ、今また私たちに与えられている同じ律法を守らなければならないのである。すなわち、私たちが主のみ前に完全な者となる必要があるのである。この場合も主は私たちが応じることのできない条件は出されなかった。

この条件をアブラハムに示すにあたって、主はアブラハムがこの律法に従う者としてふさわしくなり、条件を完全に満たせるようにその方法を与えられた。聖きみたまにあずかる特権を授けられたのである。すなわち聖典の中では、アブラハムに福音が説かれ、その福音を通してアブラハムは神につける事柄を理解する聖なる力を得ることができたと記されている。この助けをなくしては、だれも主のみ前にあって完全な状態になることはできないのである。

アブラハムはこの聖なる律法に従って主の

み前を歩む信仰を持った人であったが、そんな彼にも時として信仰の試しがあった。しかし、神のみこころに従うという強い決意を持っていたアブラハムは、どんなことにも落胆しなかった。私たちはよく、完全に律法を遵守することはできないとか、完全な者となることは無理であると言う。ある意味ではそうかもしれない。しかし、これは全能者が私たちに下された戒めであり、それを無視することはできないのである。苦難な状態に置かれた時、それは私たちにとって、肉体の弱さを克服するために、力と理解力、知恵と恵みを主に求める絶好の機会である。

主の望みは私たちが日の光栄の王国に導き入れることである。そのために直接啓示を与えて、私たちが永遠の世界に生まれた神の子供であることを示された。また私たちは、天父のみもとに帰って御父の完き栄光が受けられるよう自らを備えるという特別な目的のために、この地上に送られたことを告げられた。それであるから、私たちはこの律法に従うよう努め、自らの思いと望みと心とを清めなければならない。そのように清く汚れないものとなった時、私たちの心はあらゆることについて主に向けられ、天父のみこころを行なうこと以外考えなくなるのである。そのような領域に達した人こそ完全な人であり、何を行ない、どこへ行こうとも神の祝福を受けられる人である。

しかし、私たちは愚かさや肉体の弱さのために、多かれ少なかれ無知な点があり、その結果過ちを免れ得ないのが現実である。そうであるからと言って、神のこの命令に従わなくてもよいという理由にはならない。しかも主はこの命令を達成できる方法を私たちの手の届く範囲内に置いて下さっている。これが、救い主が述べられた完全という言葉の意味であり、主がアブラハムに言われた言葉の意味でもあると私は思う。人は、ある事には完全であるが、他の事には完全でないということがあがる。知恵の言葉を忠実に守って

いる人は、その律法に関しては完全であると言える。罪を悔い改めて、その赦しを受けるバプテスマの水に入った時、それに関する限り完全である。しかし、使徒ヨハネはこう言っている。私たちは「神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現われる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るからである。

彼についてこの望みをいだいている者は皆、彼がきよくあられるように自らをきよくする。」
(1ヨハネ3：2—3)

末日聖徒が目指すべき完全とはこのような状態である。父なる神のようになり、そのみに住むことができるような子供になることである。私たちは神の御子が姿を現わされる時、肉体が更新され栄光化され、虚弱な肉体は栄光の体と変わることを望んでいる。(ピリピ3：21参照)これが私たちの考える完全である。

ここで皆様と考えていただきたいことがある。皆様は自分を本当に清くしようと努めているだろうか。神の清さにまで自らを清めようとせず、すなわち、日々神と人に対して少しのとがめもないように努めることをせずに、正しい道を歩んでいると言えるだろうか。私たちの中には、1日、1週間、1カ月を罪を犯すこともなく、自らを正しく管理し、日々神のみたまの導きを熱心に求めて生活している人が大勢いる。そのような人々であっても、時には大きな試練に遭い、乗り越えてゆかなければならない障害に直面する。たとえそうであっても、努力を止めてよい理由はない。力を倍にしてでも、目的を達成しようと決意を固める必要がある。

アブラハムやそのほか聖く偉大人々の生涯をよく研究する時、彼らの努力が、たとえ義にかなったものであっても必ずしも報われていないことが分かる。それであるから、弱点をつかれても落胆してはならない。犯してしまった過ちや間違いはすぐに悔い改め、で

きる限りの償いをし、それからよりよいことができるよう新たな力を神に求めるがよい。

アブラハムは父の家を去ってからは、毎日神のみ前に義しく歩むことができた。しかしそのようなアブラハムにも厳しい試練が訪れた。事実、それは想像を絶するほどの試練であった。主から、愛する独り息子を犠牲として捧げるように命じられた。この息子を通して偉大な約束が成就されるという祝福を主から受けていたにもかかわらず、そのような命じられたのである。しかし、アブラハムは神からの正しい導きによってこの試しを乗り越え、神への信仰と忠誠を示すことができた。アブラハムがこのような特質を偶像崇拜に浸る両親から受け継いだとは思えない。アブラハムは、神の祝福によってその特質を受け継ぎ、しかも私たちと同じように肉体との戦いに打ち勝ち、疑いの念をすべて拭き去ることによって初めて、これほど厳しい試練にも耐えることができたのである。

使徒パウロはこう述べている。「キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず……」
(ピリピ2：5—6)

神のみ前をこの目的をもって歩む者はだれでも、神のように自らを清くし、神のみ前を正しく歩むように努めるであろう。私たちに愚かさや弱点があるが、できるだけ早くそれらを改めなければならない。しかも、このことを自分たちの子供の心にも植え付ける必要がある。そうすれば、神を恐れる気持ちが幼いうちから養われ、どのような状況に置かれても主のみ前に自らを正しく処するようになるであろう。もし夫婦が一日だけけんかをしなかった、また人に不親切な行ないをしなかった、あるいは神のみたまを悲しませることをしなかったならば、それはとてもよいことである。その日は完全であったと言えるかもしれない。翌日も同じようにしてみる。翌



多くの者が厳しい苦難を被る原因のひとつとして、人生の偉大な目的をすぐに忘れるとことがある。私たちは、この世に私たちを送り出して肉体を与えて下さった天父のみこころや、私たちに授けられている聖なる召しについてすぐ忘れる性癖がある。しかも、この世のはかない事柄を超越できず、神の下された貴い援助を無にし、しばしば世の水準にまで自らを下落させている。天父のような完全さを身に付けようと絶えず決意を新たにしないならば、私たちが世の人々と何ら変わりないのである。

これは主がいにしへの聖徒たちに与えられた勧告である。彼らは激情に走りやすく、私たちと同じような誘惑に直面していた。主は彼らがこの勧告に従うことができるかどうかを御存じであった。主はその子らに不可能なことは要求されなかったし、これからもされないであろう。「曲った邪悪な時のただ中であって」、邪悪で墮落した民に救いの福音を広めようとしているイスラエルの長老たちは、このみたまを特に求める必要がある。彼らだけでなく、少年も少女もこの教会に属する聖徒と呼ばれるにふさわしい人は皆、自らの良心を神のみ前に清くするようという要求に従って行動しようという望みを抱く必要がある。老いも若きもこの目的を胸に掲げることは素晴らしいことである。また、若人がその顔から神の光と英知を輝かせ、人生の目的を正しく理解し、世の中の愚かさや虚栄、人の弱点や過ちを乗り越えていく、このような道を歩む姿を見ることはこの上ない喜びである。

兄弟姉妹の上に神の祝福があって、神の聖きみたまが注がれるように。そして皆様の行ない、日々直面する様々な事柄の上に、自己の務めや全能者から与えられる召しの上に祝福があるように。さらに神のみたまが湧き出る水のごとくに皆様を潤し、永遠の生命へと導くよう、そして皆様が、生涯神を恐れ敬って生活できるよう、イエスのみ名により祈るものである。アーメン

日もできないだろうか。では3日目はどうだろう。3日目はできないという理由はどこにもない。使徒ペテロはいかなる状況の下でも救い主の傍らにいようと考えていた。しかし彼はそれができなかった。けれどもそのことで落胆していたら、彼は恐らくすべてのものを失っていたであろう。ところが彼は悔い改め、忍耐したので何も失わず、すべてのものを得たのであった。彼の経験は私たちにとっても大いに役立つ。

末日聖徒は、かつて使徒たちが示して下さったこの精神を養い続ける必要がある。

すべての人に対して少しの良心の心がめも感じない日々を過ごすようにしなければならない。神は私たちが援助を求めることのできるよりどころ、すなわち使徒と予言者、伝道者などをおき、「聖徒たちをととのえ」る方法を示して下さった。(エペソ 4 : 11—12) また主から授けられている確かな導き手である聖きみたまは、私たちが逆境に直面した時に、なすべきことを教え、力と助けを与えて下さるのである。

福音によって自らの内に感情や野心を抑制する力を持っていることを認識し、自分の意志を天父のみこころに従わせ、家族や知人に不快な思いを抱かずに、地上に小さな天国を築くよう努め励むならば、私たちは人生におけるこの戦いに勝ったも同然である。



厳寒の下でのバプテスマ

ジーン・チップマン

アントンは戸口から石畳の通りに出て、どうしようかと一瞬思案した風な様子を見せ、それから妻の方を振り向いて叫んだ。

「大丈夫だ。アイビーン、出掛けようか。」

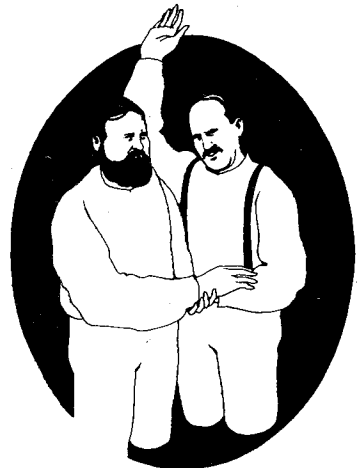
妻も外に出て来た。彼女は手織りのスカーフと厚手のコートに身を包んでいた。2月の底冷えのする寒い夜である。目指すは家から100メートルほど離れたところにある海岸である。妻の後から子供たちもついて来た。ソルボールドとアストラはまだバプテスマを受ける年齢にはなっていなかったが、両親がバプテスマを受けることを十分理解できたり、それを喜んでいたり。ところが今のアントンは浮かぬ顔であった。彼は、デンマークのオールボルグの美しい町をおし黙ったまま、物思いに沈んだ様子で歩いていた。

すっかり冬の雪に覆われた小さな庭を通り抜けながら、彼は2年ほど前に初めて宣教師に会った時のことを思い出した。1893年の夏のことである。ちょうどアントンが庭木の刈り込みをしていたところに宣教師が通りかかり、話し掛けてきたのであった。

「あの日宣教師たちは私の心に良い種を蒔いてくれた。確かにそれを感じた。」アントンは思いにふけりながら、ゆっくりと歩いていた。「翌日、牧師が来たので、私は宣教師から聞いたことを話した。すると牧師はその教え

をけなし、自分の考えをまくしたてた。次に長老たちが来ると、私は牧師から聞いたことを話した。宣教師は再び福音を教え、私の心に種を蒔いて行った。私はこれはもう自分で知るしかないと思った。」

その夜は闇が濃かった。子供たちは父母にびったり寄り添っていた。ソルボールドは父の手をしっかりと握り、かわいいアストラはアイビーンにしがみついていた。アントンはそんなソルボールドを見ながら、今度は自分の子供時代のことを思い出した。飼っていた牛のこと、冬になると木靴を履いて走り回ったこと、そして猛吹雪の日にかから遠く離れて助けも呼べずに死んでいった妹のこと、1800



年代半ば、ドイツと戦争していた時に、9人の家族を養うことができずに苦しんでいた父の姿、その父を助けるために朝の2時から夜の11時まで畑で働いたこと、また一晩ベッドの中で泣き明かしたこと。「あの頃、自分は何のために生まれたのかと思ったものだ。自分はどんな役にたっているのか分からなかった。目の前にあるのは、たいして価値のない労働の繰り返しだけだった。」

極寒の冷気がアントンの顔を横なぐりにした。彼はアイビーンと子供たちは大丈夫かと気になった。冷たい風は氷河を思わせる。彼はデンマークが農耕に適した起伏のある平地になったのは氷河期によるものであると習ったことを思い出した。数年間の義務教育も捨てたものではないと思った。それも祖国デンマークが教育と労働を重視していたからである。やがて野原の向こうに、停泊中の船のマストが見えてきた。

バプテスマを受ける場所が近くなると、何とも言えない孤独な気持ちになった。「わが祖国、わが先祖たち、そしてこれまで慈しみ大切にしてきたものすべてを、自分にはるかかなたの見ず知らずの国で生まれた宗教のために裏切ろうとしているのではないだろうか。」

一家は最後の角を曲った。すると眼前にすっかり氷で覆われた海が広がった。アントンは改めて白い肌着の感触を身に感じた。それはアントンが昔、大病を患って以来、身に着けておくよう言われてきた肌着である。その時、彼は初めて自分の証を持ったのである。肺炎で1年間生死の境をさまよひ、長老たちから、信仰と、特別な祝福によって癒されるので儀式を受けるようにと勧められ、アントンはその勧告に従ったのであった。その後間もなく、アントンは、真理を探究する上に覆いかぶさっていた暗雲をきっぱりと拭い去ることができた。そして他の教会の牧師に、自分はふたりの主人に仕えることができないと告げた。それまでアントンの良き友人であっ

た牧師たちも、アントンがモルモン教会に加入する決心をしたことを聞いて、その友情を断ってしまった。アントンを迷える人間として見離したのであった。

アールボルグのモルモン教会の会員たちはすでに海辺に集まっていた。ランタンをかざす人たちもいた。人数は少ないが、皆はつらつとしていた。讃美歌を歌う顔に笑みが満ちていた。しかし、まだアントンは黙りこくっていた。かわいい子供たちの顔を見詰めながら、自分のしていることは子供にとって正しいことだろうかと考えていた。公立学校ではその数も少ないモルモンに対する偏見が強く、小さな子供たちにはかわいそうだ。私立の学校を捜さなければ。

讃美歌が終わり、開会の祈りが捧げられた。宣教師たちは、バプテスマを受けるジェンセン兄弟姉妹が寒さで病気にならないように祝福を祈った。氷に穴が開けられた。アントンと妻のアイビーンのふたりに聖なる儀式が施された。人々は誕生したばかりのこの教会員を抱き締め、握手をして祝い、それから急いで暖かい火の燃えている自宅へ送って行った。その時、アントンは何か特別な、まったく予期しなかったことに気付いたのである。帰る途中、アントンはまるで跳びはねるような感じて歩いている自分に気付いた。そんな彼を、妻と子供たちはにこにこしながら見ていた。そこには苦しみ悩んだ重荷はなかった。彼は自分は正しいことをしたのだと思った。そして、その時はじめて自分には人生でなすべき大切なことがあると悟ったのである。

「私は翌日、以前の友人であった牧師のところへ証を述べに行きました。本当に幸せで、まるで世界中の人を改宗できそうな、またそうした気分でした。私は、バプテスマを受けることによって得た平安と喜びをみんなに知って欲しいと思いました。中でも一番素晴らしいことは、私だけでなく、愛する家族のためにも、さらに大きな喜びと知識が約束されていることをはっきりと知ったことです。」



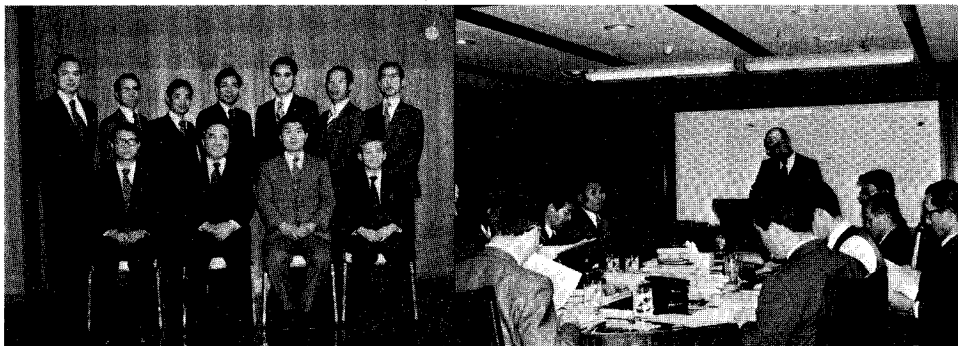
安芸宏長老，地区代表に召される

去る1月20日，新たに安芸宏長老が地区代表に召され，これまで渡辺驩長老が担当していた大阪地区を引き継ぐことになりました。なお渡辺長老は従来通り名古屋地区をそのまま担当します。

地区代表とステーク部長との セミナー開かれる

去る1月20，21の両日，アジア地域事務局において，七十人第一定員会会員菊地良彦長老の管理の下に，地区代表と日本の全ステーク部長とのセミナーが催されました。

以下の写真はセミナーに出席された方々とそのセミナーの光景です。



モルモン・タバナクル合唱団 来日決まる

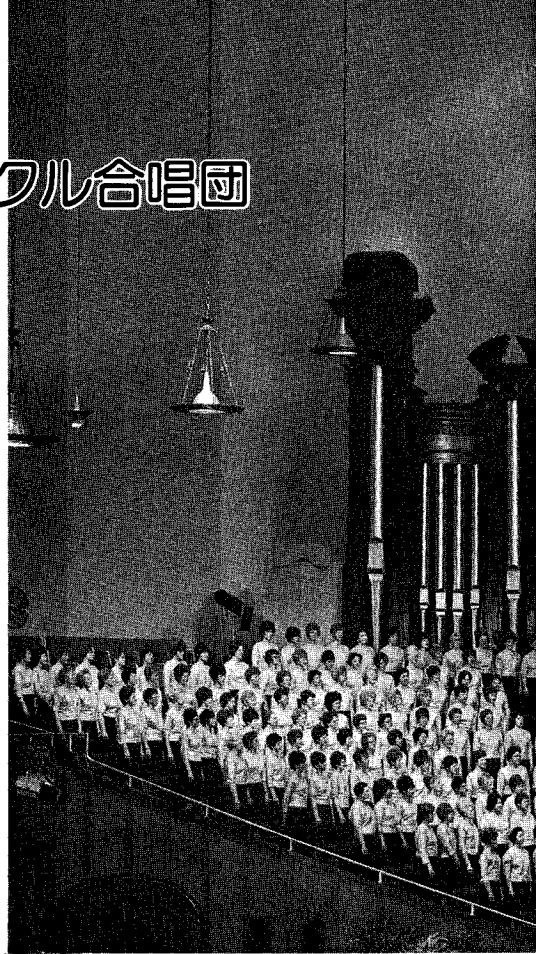
この度、モルモン・タバナクル合唱団が名古屋の中京テレビ株式会社の招待で日本を訪れ、東京、横浜、名古屋、大阪、京都の5カ所で、アジア初の公演を行なうことになりました。

モルモン・タバナクル合唱団は、1847年7月24日、開拓者の一団がグレートソルトレーク盆地に一歩を印したその日から、今日に至るまで、ロッキーの谷間にその歌声を響かせてきました。この合唱団は総勢375名から成り、主婦や教員、弁護士、会社役員と、いろいろな職業を持つ人々が集まっています。

1929年に、この合唱団の合唱は全米で放送されるようになり、現在毎週日曜日の朝、CBS放送を通じて100局以上の放送局に送られ、アメリカだけでなく海外でもその歌声が聴かれるようになっていきます。

初めての海外公演は1955年のことで、^半行はヨーロッパを訪れました。この時、スコットランド、イギリス、デンマーク、ドイツ、スイス、フランスの各地で公演し、賞賛を博しています。

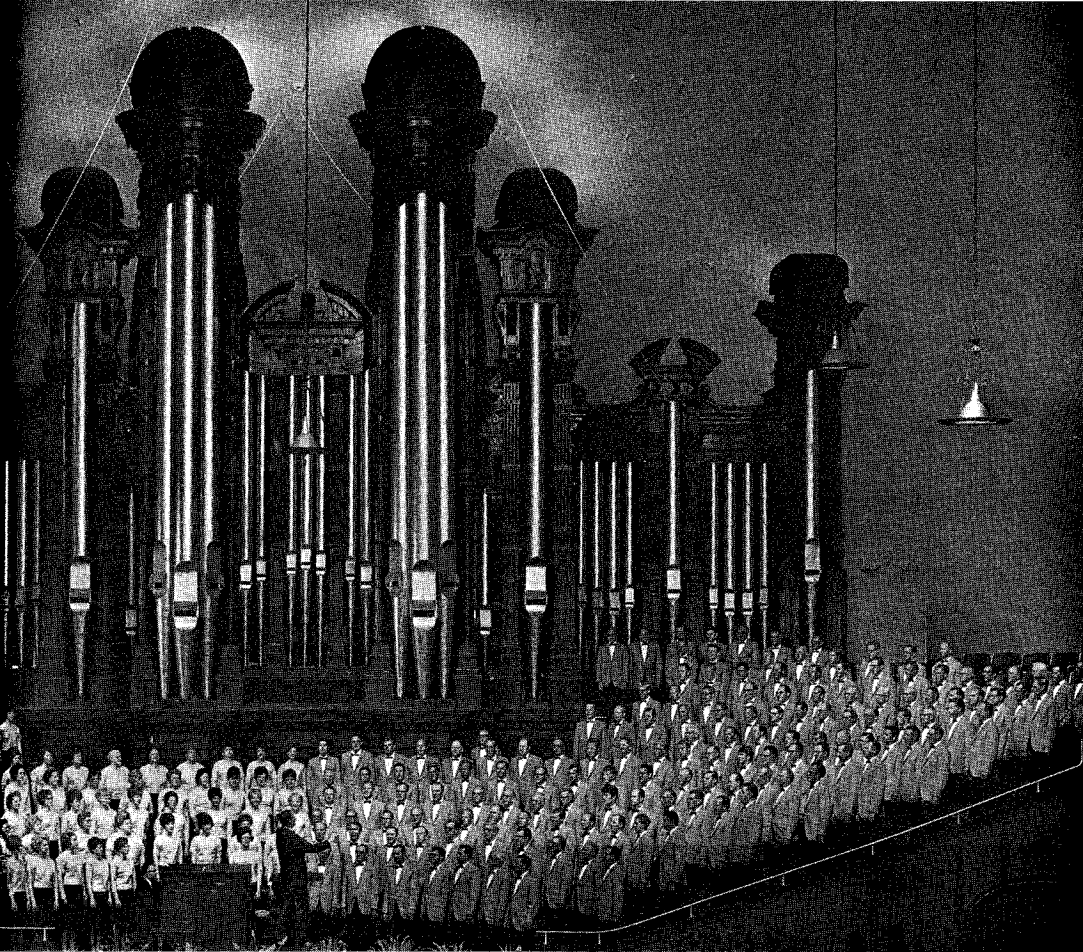
その後、1958年、1967年、1969年、1975年と4回にわたってカナダで公演し、1968年と



1972年には、メキシコ・シティーでも公演を行ないました。

そのほか米国大統領就任式にもしばしば招待され、ホワイトハウスの政府高官たちの前で歌声を披露し、『大統領の合唱団』とも呼ばれるようになりました。

今回のタバナクル合唱団の来日を契機に、日本国民が末日聖徒のことを正しく理解し、福音が広く宣べ伝えられる素地ができあがるものと期待されています。



公演の日程は以下の通りです。

- | | | |
|----------|----------|------------------|
| 9月5日(木) | 午後6時30分 | 神奈川県民ホール(横浜) |
| 9月6日(木) | 午後3時, 7時 | NHKホール(東京) |
| 9月7日(金) | 午後3時, 7時 | 名古屋市民会館(名古屋) |
| 9月8日(土) | 午後3時, 7時 | 大阪フェスティバルホール(大阪) |
| 9月10日(月) | 午後3時, 7時 | 京都会館(京都) |
| 9月11日(火) | 午後7時 | 普門館(東京) |
| 9月12日(水) | 午後7時 | 普門館(東京) |

日々のいとなみの中で 感じる神の祝福



日本仙台伝道部
郡山支部
伊藤良雄

私は1974年の秋、宣教師の導きで妻と共にバプテスマを受け、主の祝福に満たされ、天が開ける程の喜びを感じました。けれども私たちにはひとつの心配がありました。理容という職業を持つ私たちが、教えの通り安息日にいつも教会に集うことができるだろうか。職業柄、仕事がどうしても日曜日に集中し、平日の3倍以上消化しないと、御得意様に迷惑をかけてしまうのです。安息日を完全に休むわけにも行かず、困った私たちは宣教師に相談したところ、福音に生きるために職業を替えた人がたくさんいます、ということでした。

50歳を越えた私は今までこの職業一筋に歩んできたし、今ここで職替えをしても家族を扶養する責任に自信がなく、妻と共に悩んでしまいました。改宗する時に受けた主の助けと導きを強く信じ、今後も主に助けを願いながら現在の職業を続け、しかも教会に集えないものかと妻と話し合いました。そして安息日には二人が交代で教会に行き、帰ってから仕事をすることにしたのです。最初の頃、多忙な日は二人共教会に集わないことがよくあ

りましたが、時がたつにつれて、教会に集いたいという気持ちが強くなり、どんなに忙しくても教会に集うようになりました。しかし反面お客様からの苦情も多くなり、中には「客を待たせておきながら出掛けるとは商売不熱心だ、客を馬鹿にしている」と怒りの言葉を残して帰って行く客もいました。そのたびに私たちは胸を強く締め付けられる思いがしました。それでも私たちは教会に集いたい気持ちがますます強くなり、次は時間を定めて休憩時間を取り、店を閉めて二人で教会に集い、教会から帰って開店し、仕事をする計画を立てました。しかしなかなか思うようにいかず、ひとりが残らねばならない時もありました。「あなたは責任があるから早く行って下さい」と妻に送り出され、自分も教会に集いたくろうに、本当に申し訳ないと思いながら教会に向かいます。そんな思いで教会に行き、充実した安息日を送っている立派な兄弟姉妹の姿を見ると、教会から帰ってもまた仕事をしなければならぬ自分たちを恥ずかしく思い、またなさけなくなるのでした。そんな時、多くの兄弟姉妹の深い愛に包まれて喜んで教会

に集っている我が子の笑顔を見ると、主の光を感じたようになり、それが唯一の心の支えでした。

私たちのような信仰の薄い者にも主はよく準備された仕事を与えて下さり数多くの祝福を下さることを心より感謝しています。1978年8月、私たちに突然神殿訪問のチャレンジが与えられました。私は妻に、その費用の捻出の見通しが立たないので参加は無理のようだと言ったところ、妻は食事の回数を減らしてでも是非参加したいということです。私たちは主に祈り、その準備をすることにしました。この話を聞きつけた弟が「この機会に是非参加したら」と進んで協力を申し出てくれました。主が私たちを導き祝福して下さいていることを本当に身近に感じ心より感謝しています。

しかし訪問の出発を目前にひかえた私たち家族に大きな試練が訪れました。出発の前夜9時頃、子供が突然発熱し、医師の診療を受けたのですが、熱がいつこうに下がらず午前2時頃には39度を越えてしまったのです。出発は5時間後に迫っています。私たちは全くうろたえてしまいました。私は濯油の儀式を執行し、姉妹と共にただひたすら主に祈り、助けを求めました。こうして朝、駅に向かう頃には子供の熱も下がり始めていました。医師の指示を求めたところ、「大丈夫でしょう」という診断なので上京の途につきました。ところが、東京に着いて間もなく、また子供の容態が悪くなり、39度の高熱にうなされるようになってしまいました。タオルで頭を冷やし、「病気ではハワイに行くことはできないから家へ帰ろう」と子供に話をしたところ、子供は「どうしても行きたい」と泣き出してし

まうのです。私は妻と子供に「私たちは神殿に行くために一生懸命準備して東京まで来た。それでも、しのぶが熱を出している。これは神様が私たちの家族の信仰が足りないので神殿に行くことをお許しにならないのかも知れない。これから3人で神様にお祈りをしてよくお願いしてみよう。そして空港まで行って受付の時間までに熱が下がらない時は、これは神様が私たち家族に命じられている言葉なのだから、家へ帰り、次の機会に訪問できるように一生懸命努力しよう」と話をし、子供を納得させました。

私たちは駅のベンチで主に祈りました。空港行きの電車は50分位で到着するのですが、驚いたことに乗車したとたん、子供の熱がどんどん下がり、空港に着いた時には平熱になり元気な姿でお腹が空いた、何かほしいと言うほどに回復していました。私たちには悪夢のような20時間でした。しかし主なる神様は私たちを見守り、そして祝福を与え、このことを通して私たちの信仰を確かなものとして下さいました。神殿におもむくに当たり、私たち家族に心の準備を与えて下さったのだと思います。こうして私たちは無事に神殿訪問を終え、偉大な主のみ業に接し、さらに多くの祝福が受けられるようになりました。そして今後もなお一層充実した信仰生活を送れるよう努力いたしたいと思っています。

主なる神は私たち一人一人を愛し、導いて下さっていることを証申し上げます。福音が真実であることを証いたします。私たち家族をこのように改宗に導いてくれた宣教師に感謝申し上げます。これらの話と証をすべてイエス・キリストのみ名により申し上げます。アーメン。

心の糧



七十人第一定員会会員
リチャード・G・スコット

教会員でない夫を支持する

こんな話をよく耳にする。「私の夫は教会員ではありません。その上、私が教会に行くことも理解してくれません。」そんな姉妹たちに私は優しく愛をもってこう答える。「愛する姉妹、ご主人は教会員であろうがあるまいが、あなたの夫であり、家族の長であることに変わりはありません。ご主人があなたの責任に理解を示してくれなければ、あなたの方から積極的にご主人を支持するようにしたらいかがですか。家族を導く夫の力を、あなたが信じ、信頼していることを態度で示して下さい。立派な模範を示して夫を励ますことです。」



七十人第一定員会会員
バーナード・P・
ブロックバンク

素晴らしい約束

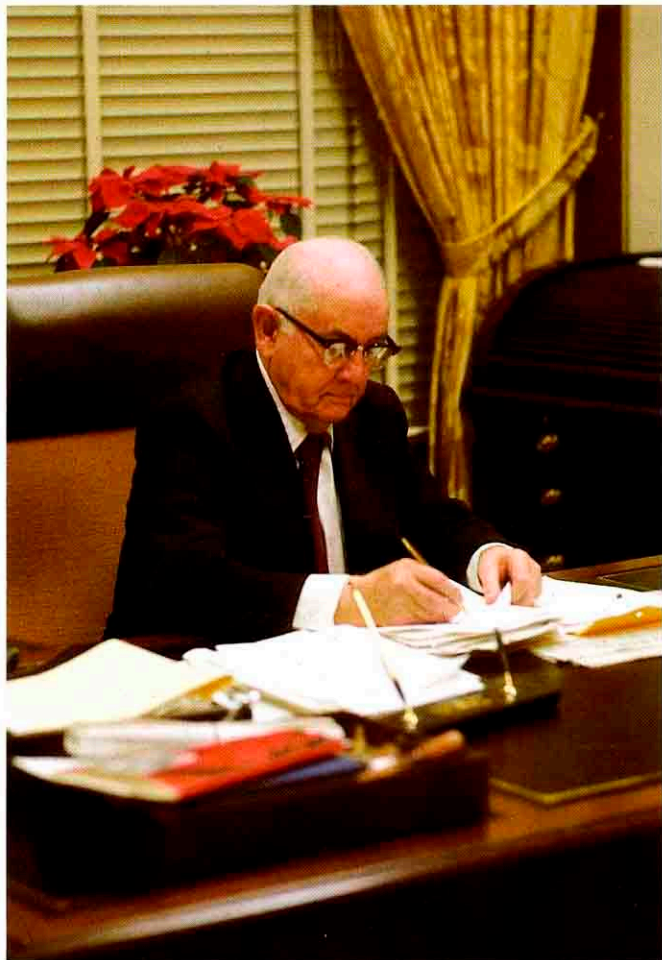
あなたの日々の生活で主のお陰を被っていることはないだろうか。自分は主に負うところは何もないと言う人もいる。しかし、両親や自分自身の霊、知性、肉体、太陽の光、地球、友人や愛する人々、これらはみな、主が与えて下さったものである。

ある若者がかつて私にこう言った。「主は私のために何もして下さいません。ですから、什分の一を納めません。」

私は答えた。「もし主がほんのひと時でも、私たちから空気を取り上げられるとしたら、あなたは心を変えますか。」

「主はそんなことはなさらないでしょう」と若者は答えた。あなたならどうだろうか。もし今から2分間空気がなくなり、あなたが心と勢力と思いと体力を尽くして主を愛すると同意した時に、元通り空気を送って下さるとしたら、あなたはすぐに主に従うだろうか、それともしばらくの間考え込むだろうか。

主は人に、主を愛するように強いたりはなさらない。その代わりに、次のような素晴らしい特権と祝福を約束しておられる。「神の誠命いましめを守るに忠実まこと且つ勤勉なれ。さらばわれわが慈愛の腕の中に汝を抱かん。」(教義と聖約6:20) 何という素晴らしい約束であろうか。神は戒めを守る人を慈愛の腕の中に抱いて下さるのである。



3月28日，84回目の誕生日を迎える
スペンサー・W・キンボール大管長